

雁

森鷗外

青空文庫

壺^{いち}

古い話である。僕は偶然それが明治十三年の出来事だと云うことを記憶している。どうして年をはつきり覚えてるかと言うと、その頃僕は東京大学の鉄門の真向いにあつた、^{かみじょう}上条と云う下宿屋に、この話の主人公と壁一つ隔てた隣同士になつて住んでいたからである。その上条が明治十四年に自火で焼けた時、僕も焼け出された一人^{いちにん}であつた。その火事のあつた前年の出来事だと云うことを、僕は覚えていいるからである。

上条に下宿しているものは大抵医科大学の学生ばかりで、その外^{ほか}は大学の附属病院に通う患者なんぞであつた。大抵どの下宿屋にも特別に幅を利かせている客があるもので、そう云う客は第一金廻りが好く、小氣^{こぎ}が利いていて、お上^{かみ}さんが箱火鉢を控えて据わつていゝる前の廊下を通るときは、きつと声を掛ける。時々はその箱火鉢の向^{むこう}側^{がわ}にしやがんで、世間話の一つもする。部屋で酒盛をして、わざわざ肴^{さかな}を拵^{こしら}えさせたり何かして、お上さんに面倒を見させ、我^{わが}儘^{まま}をするようできて、実は帳場に得の附くようにする。先^まずざつとこう云う性^{たち}の男が尊敬を受け、それに乘じて威福^{ほし}を擅^{しま}にすると云うのが常である。然^{しか}るに

上条で幅を利かせている、僕の壁隣の男は頗る趣を殊にしていた。

この男は岡田と云う学生で、僕より一学年若いのだから、とにかくもう卒業に手が届いていた。岡田がどんな男だと云うことを説明するには、その手近な、際立った性質から語り始めなくてはならない。それは美男だと云うことである。色の蒼い、ひよろひよろした美男ではない。血色が好くて、体格ががっしりしていた。僕はある顔の男を見たことが殆ど無い。強いて求めれば、大分あの頃から後になって、僕は青年時代の川上眉山と心安くなつた。あのとうとう窮境に陥つて悲惨の最期を遂げた文士の川上である。あれの青年時代が一寸岡田に似ていた。尤も当時競漕の選手になつていた岡田は、体格ではかに川上なんぞに優つていたのである。

容貌はその持主を何人にも推薦する。しかしそればかりでは下宿屋で幅を利かすことは出来ない。そこで性行はどうかと云うと、僕は当時岡田程均衡を保つた書生生活をしてゐる男は少かろうと思つていた。学期毎に試験の点数を争つて、特待生を狙う勉強家ではない。遣るだけの事をちゃんと遣つて、級の中位より下には下らずに進んで来た。遊ぶ時間は極めて遊ぶ。夕食後に必ず散歩に出て、十時前には間違なく帰る。日曜日には舟を漕ぎに行くか、そうでないときは遠足をする。競漕前に選手仲間と向島に泊り込んで

いるとか、暑中休暇に故郷に帰るとかの外は、壁隣の部屋に主人のいる時刻と、留守になっている時刻とが狂わない。誰でも時計を号砲どんに合せることを忘れた時には岡田の部屋へ問いに行く。上条の帳場の時計も折々岡田の懐中時計に拠よつて匡ただされるのである。周囲の人の心には、久しくこの男の行動を見ていればいる程、あれは信頼すべき男だと云う感じが強くなる。上条のお上さんがお世辞を言わない、破格な金遣いをしない岡田を褒め始めたのは、この信頼もとに本もとづいてゐる。それには月々の勘定をきちんとすると云う事実あずが与あずかつて力あるのは、ことわるまでもない。「岡田さんを御覧なさい」と云う詞ことばが、屢しばしば々お上さんの口から出る。

「どうせ僕は岡田君のようなわけには行かないさ」と先を越して云う学生がある。此かくの如くにして岡田はいつとなく上条の標準的下宿人になつたのである。

岡田の日々にちにちの散歩は大抵道筋が極まつていた。寂しい無縁坂を降りて、藍染川あいそめがわのお齒黒はくろくのような水の流れ込む不しの忍ぼすの池の北側を廻つて、上野の山をぶらつく。それから松ま源つげんや雁鍋がんなべのある広小路、狭い賑にぎやかな仲な町なちようを通つて、湯島天神の社内はに這はい入つて、陰気な臭桶寺からたちでらの角を曲がつて帰る。しかし仲町を右へ折れて、無縁坂から帰ることもある。これが一つの道筋である。或る時は大学の中を抜けて赤門に出る。鉄門は早く鎖とぎされ

るので、患者の出入する長屋門から這入って抜けるのである。後にその頃の長屋門が取り払われたので、今春木町から衝き当る処にある、あの新しい黒い門が出来たのである。赤門を出てから本郷通りを歩いて、栗餅の曲擣をしてる店の前を通って、神田明神の境内に這入る。そのころまで目新しかった目金橋へ降りて、柳原の片側町を少し歩く。それからお成道へ戻って、狭い西側の横町のどれかを穿って、矢張臭橘寺の前に出る。これが一つの道筋である。これより外の道筋はめったに歩かない。

この散歩の途中で、岡田が何をするかと云うと、ちよいちよい古本屋の店を覗いて歩く位のものであった。上野広小路と仲町との古本屋は、その頃のが今も二三軒残っている。お成道にも当時そのままの店がある。柳原のは全く廃絶してしまった。本郷通のは殆ど皆場所も持主も代っている。岡田が赤門から出て右へ曲ることのめったにないのは、一体森川町は町幅も狭く、窮屈な処であったからでもあるが、当時古本屋が西側に一軒しかなかったのも一つの理由であった。

岡田が古本屋を覗くのは、今の詞で云えば、文学趣味があるからであった。しかしまだ新しい小説や脚本は出ていぬし、抒情詩では子規の俳句や、鉄幹の歌の生れぬ先であったから、誰でも唐紙に摺った花月新誌や白紙に摺った桂林一枝のような雑誌を読んで、

槐かいなん南、夢香むこうなんぞの香奩こうれんたい体の詩を最も気の利いた物だと思ふ位の事であった。僕も花月新誌の愛読者であったから、記憶している。西洋小説の翻訳と云うものは、あの雑誌が始めて出したのである。なんでも西洋の或る大学の学生が、帰省する途中で殺される話で、それを談話体に訳した人は神田孝平さんであったと思う。それが僕の西洋小説と云うものを読んだ始であつたようだ。そう云う時代だから、岡田の文学趣味も漢学者が新しい世間の出来事を詩文に書いたのを、面白がつて読む位に過ぎなかつたのである。

僕は人附合いの余り好くない性たちであつたから、学校の構内で好く逢う人にでも、用事がなくては話をしない。同じ下宿屋にいる学生なんぞには、帽を脱いで礼をするようなことも少かつた。それが岡田と少し心安くなつたのは、古本屋が媒なかだちをしたのである。僕の散歩に歩く道筋は、岡田のように極まつてはいなかつたが、脚が達者で縦横に本郷から下谷、神田を掛けて歩いて、古本屋があれば足を止めて見る。そう云う時に、度々岡田と店先で落ち合う。

「好く古本屋で出くわすじやないか」と云うような事を、どつちからか言い出したのが、親しげに物を言つた始である。

その頃神田明神前の坂を降りた曲角に、鉤かぎなりに縁台を出して、古本を曝さらしている店が

あつた。そこで或る時僕が唐本の金瓶梅きんぺいばいを見附けて亭主に値を問うと、七円だと云つた。五円に負けてくれと云うと、「先刻岡田さんが六円なら買うと仰おつしやいましたが、おことわり申したのです」と云う。偶然僕は工面が好かつたので言値で買った。二三日立つてから、岡田に逢うと、向うからこう云い出した。

「君はひどい人だね。僕が切角見附けて置いた金瓶梅を買つてしまったじゃないか」

「そうそう君が値を附けて折り合わなかつたと、本屋が云つていたよ。君欲しいのなら譲つて上げよう」

「なに。隣だから君の読んだ跡を貸して貰えば好いいさ」

僕は喜んで承諾した。こんな風で、今まで長い間壁隣に住まいながら、交際せずにした岡田と僕とは、往いつたり来たりするようになったのである。

式に

そのころから無縁坂の南側は岩崎の邸やしきであつたが、まだ今のような魏ぎ々たる土塀で囲つてはなかつた。きたない石垣が築いてあつて、苔こけむ蒸した石と石との間から、齒しだ朶や杉菜が

覗いていた。あの石垣の上あたりは平地だか、それとも小山のようにでもなっているか、岩崎の邸の中に這入って見たことのない僕は、今でも知らないが、とにかく当時は石垣の上の所に、雑木が生えたい程生えて、育ちたい程育っているのが、往来から根まで見えていて、その根に茂っている草もめつたに刈られることがなかった。

坂の北側はけちな家が軒を並べていて、一番体裁の好いのが、板塀を繞らした、小さいしもた屋、その外は手職をする男なんぞの住いであつた。店は荒物屋に烟草屋位しかなかつた。中に往来の人の目に附くのは、裁縫を教えている女の家で、昼間は格子窓の内に大勢の娘が集まって為事しごとをしていた。時候が好くて、窓を明けているときは、我々学生が通ると、いつもべちやくちや盛んにしゃべっている娘共が、皆顔を挙げて往来の方を見る。そして又話をし続けたり、笑つたりする。その隣に一軒格子戸を綺麗きれいに拭き入れて、上がり口の叩きに、御影石みかげいしを塗り込んだ上へ、折々夕方に通つて見ると、打水のしてある家があつた。寒い時は障子が締めてある。暑い時は竹簾たけすだれが卸してある。そして為立物師したてものしの家の賑やかな為めに、この家はいつも際立つてひっそりしているように思われた。

この話の出来事であつた年の九月頃、岡田は郷里から帰つて間もなく、夕食後に例の散歩に出て、加州の御殿の古い建物に、仮に解剖室が置いてあるあたりを過ぎて、ぶらぶら

無縁坂を降り掛かると、偶然一人の湯帰りの女がかの為立物師の隣の、寂しい家に這入るのを見た。もう時候がだいぶ秋らしくなって、人が涼みにも出ぬ頃なので、一時人通りの絶えた坂道へ岡田が通り掛かると、丁度今例の寂しい家の格子戸の前まで帰って、戸を明けようとしていた女が、岡田の下駄の音を聞いて、ふいと格子に掛けた手を停めて、振り返って岡田と顔を見合せたのである。

紺縮こんちぢみの単物ひとえものに、黒襦子くろじゆすと茶献上との腹合せの帯を締めて、織ほそい左の手に手拭てぬぐやら石鹼箱しやぼんばこやら糠袋ぬかぶくろやら海綿うめんやらを、細かに編んだ竹の籠かごに入れたのを懈たるげに持つて、右の手を格子に掛けたまま振り返った女の姿が、岡田には別に深い印象をも与えなかつた。しかし結い立ての銀杏いちょうがえ返しの鬢びんが蝉せみの羽はのように薄いのと、鼻の高い、細長い、稍やや寂しい顔が、どこの加減か額から頬に掛けて少し扁ひらたいような感じをさせるのが目に留まつた。岡田は只それだけの刹那せつなの知覚を閲歴したと云うに過ぎなかつたので、無縁坂を降りてしまふ頃には、もう女の事は綺麗に忘れていた。

しかし二日ばかり立つてから、岡田は又無縁坂の方へ向いて出掛けて、例の格子戸の家の前近く来た時、先きの日の湯帰りの女の事が、突然記憶の底から意識の表面に浮き出したので、その家の方を一寸見た。豎たてに竹を打ち附けて、横に二段ばかり細く削った木を渡

して、それを蔓かざらで巻いた肱掛窓ひしかけまどがある。その窓の障子が一尺ばかり明いていて、卵の殻を伏せた万年青おもとの鉢が見えている。こんな事を、幾分かの注意を払って見た為めに、歩調が少し緩くなつて、家の真ん前に来掛かるまでに、数秒時間の余裕を生じた。

そして丁度真ん前に来た時に、意外にも万年青の鉢の上の、今までねずみいろ鼠色の闇に鎖されていた背景から、白い顔が浮き出した。しかもその顔が岡田を見て微笑ほほえんでいるのである。

それからは岡田が散歩に出て、この家の前を通る度に、女の顔を見ぬことは殆ど無い。岡田の空想の領分に折々この女が闖ちんにゆう入して来て、次第に我物顔に立ち振舞うようになる。女は自分の通るのを待っているのだろうか、それともなんの意味もなく外を見ているので、偶然自分と顔を合せることになるのだろうかと言う疑問が起る。そこで湯帰りの女を見た日より前に溯さかのぼつて、あの家の窓から女が顔を出していたことがあったか、どうかと思つて考えて見るが、無縁坂の片側町で一番騒がしい為立物師の家の隣は、いつも綺麗に掃除のしてある、寂しい家であつたと云う記念の外には、何物も無い。どんな人が住んでいるだろうかと疑つたことは慥たしかにあるようだが、それさえなんとも解決が附かなかつた。どうしてもあの窓はいつも障子が締まっていたり、簾が降りていたりして、その奥はひつ

そりしていたようである。そうして見ると、あの女は近頃外に気を付けて、窓を開けて自分の通るのを待っていることになつたらしいと、岡田はどうとう判断した。

通る度に顔を見合せて、その間々にはこんな事を思っているうちに、岡田は次第に「窓の女」に親しくなつて、二週間も立つた頃であつたか、或る夕方例の窓の前を通る時、無意識に帽を脱いで礼をした。その時微笑ほのじろ、白い女の顔がさつと赤く染まつて、寂しい微笑ほほえみの顔が華やかな笑顔になつた。それから岡田は極まつて窓の女に礼をして通る。

参さん

岡田は虞初新誌ぐしよしんしが好きで、中にも大鉄椎だいてつづいでん伝は全文を誦あんしやう誦しよすることが出来る程であつた。それで余程前から武芸がして見たいと云う願望がんもうを持つていたが、つい機会が無かつたので、何にも手を出さずにいた。近年競漕をし始めてから、熱心になり、仲間に推されて選手になる程の進歩をしたのは、岡田のこの一面の意志が発展したのであつた。

同じ虞初新誌ぐしよしんしの中に、今一つ岡田の好きな文章がある。それは小青伝であつた。その伝に書いてある女、新しい詞で形容すれば、死の天使を闕しきいの外に待たせて置いて、徐しすかに脂

粉よそおいこらの粧まゆめを擬すとでも云うような、美しさを性命せいめいにしているあの女が、どんなにか岡田の同情を動かしたであろう。女と云うものは岡田のためには、只美しい物、愛すべき物であつて、どんな境遇にも安んじて、その美しさ、愛らしさを護持していなくてはならぬように感ぜられた。それには平生こうれんたい香奩かうげん体の詩を読んだり、*sentimental* 《サンチマンタル》な、*fatalistique* 《ファアタリスチック》なみんしん明清めいしんの所謂いわゆる才人の文章を読んだりして、知らず識しらずの間にその影響を受けていた為めもあるだろう。

岡田は窓の女に会釈をするようになってから余程久しくなつても、その女の身の上を探つて見ようともしなかつた。無論家の様子や、女の身なりで、かこいもの囲物かこいものだろうとは察した。しかし別段それを不快にも思わない。名も知らぬが、強いて知ろうともしない。標札を見たら、名が分かるだろうと思つたこともあるが、窓に女のいる時は女に遠慮をする。そうでない時は近処の人や、往來の人の人目を憚はばかる。とうとう庇ひさしの蔭かげになつてゐる小さい木札に、どんな字が書いてあるか見ずにいたのである。

肆し

窓の女の種^{すじょう}姓は、実は岡田を主人公にしなくてはならぬこの話の事件が過去に属してから聞いたのであるが、都合上ここでざつと話すことにする。

まだ大学医学部が下谷にある時の事であった。灰色の瓦を漆^{しつくい}喰で塗り込んで、碁盤の目のようにした壁の所々に、腕の太さの木を竝に並べて嵌^はめた窓の明いている、藤堂屋敷の門長屋が寄宿舎になっていて、学生はその中で、ちと気の毒な申分だが、野獸のような生活をしていた。勿^{もちろん}論今はあんな窓を見ようと思つたつて、僅^{わず}かに丸の内の櫓^{やぐら}に残つている位のもので、上野の動物園で獅子^{しし}や虎を飼つて置く檻の格子なんぞは、あれよりはかにきやしやに出来ている。

寄宿舎には小使^{こしつかい}がいた。それを学生は外^{そとづかい}使に使うことが出来た。白木綿の兵古帯^{へこおび}に、小倉袴^{こくらばかま}を穿^はいた学生の買物は、大抵極まつている。所謂「羊羹^{ようかん}」と「金米糖^{こんべいととう}」とである。羊羹と云うのは焼芋、金米糖と云うのははじけ豆であつたと云うことも、文明史上の参考に書き残して置く価値があるかも知れない。小使は一度の使賃として二銭貰うことになつていた。

この小使の一人に末造^{すえぞう}と云うのがいた。外^{ほか}のは鬚^{ひげ}の栗の殻のように伸びた中に、口があんごり開^あいてゐるのに、この男はいつも綺麗に剃^そつた鬚^{あは}の痕^{あと}の青い中に、脣^{くちびる}が堅く結ば

れていた。小倉服も外のは汚れているに、この男のはさっぱりしていて、どうかすると唐^と棧^{うざん}か何かを着て前掛^{まへか}をしているのを見るのがあった。

僕にいつ誰^{たれ}が始めて噂^{うわさ}をしたか知らぬが、金がない時は末造が立て替えてくれると云うことを僕は聞いた。勿論五十銭とか一円とかの金である。それが次第に五円貸す十円貸すと云うようになって、借^かる人に証文を書かせる、書^{かきかえ}替^{かえ}をさせる。とうとう一人前の高利貸になった。一体元手はどうしたのか。まさか二銭の使賃を貯蓄したのでもあるまいが、一匹の人間が持つているだけの精力を一時に傾注すると、実際不可能な事はなくなるかも知れない。

とにかく学校が下谷から本郷に遷^{うつ}る頃には、もう末造は小使ではなかった。しかしその頃池^{いけ}の端^{はた}へ越して来た末造の家へは、無分別な学生の出入^{でいり}が絶えなかった。

末造は小使になった時三十を越していたから、貧乏世帯ながら、妻もあれば子もあったのである。それが高利貸で成功して、池の端へ越してから後^{のち}に、醜^{みにく}い、口やかましい女房^{あきたらな}を嫌^{きら}む思うようになった。

その時末造が或る女を思い出した。それは自分が練^{ねり}堀^{べい}町^{ちよう}の裏からせまい露地を抜けて大学へ通勤する時、折々見たことのある女である。どぶ板のいつもこわれているあたり

に、年中戸が半分締めてある、薄暗い家があつて、夜その前を通つて見れば、簷のきした下に車の附いた屋台が挽ひき込んであるので、そうでなくても狭い露地を、体を斜ななめにして通らなくてはならない。最初末造の注意を惹ひいたのは、この家に稽古けいこ三味線の音ねのすることであつた。それからその三味線の音の主が、十六七の可哀かわいらしい娘だと云うことを知つた。貧しそうな家には似ず、この娘がいつも身綺麗みきれいにしていて、着物も小ぎつぱりとした物を着ていた。戸口にいても、人が通るとすぐ薄暗い家の中へ引つ込んでしまう。何事にも注意深い性質の末造は、わざわざ探るともなしに、この娘が玉たまと云う子で、母親がなくて、親爺おやじと二人暮らししていると云う事、その親爺は秋葉あきはの原に飴細工あめさいくの床とこみせ店を出していると云う事などを知つた。そのうちにこの裏店うらだなに革命的変動が起つた。例の簷下えんげに引き入れてあつた屋台が、夜通つて見てもなくなつた。いつもひっそりしていた家とその周囲とへ、当時の流行語で言うと、開化と云うものが襲つても来たのか、半分こわれて、半分はね返つていたどぶ板が張り替えられたり、入口の模様替もようがえが出来て、新しい格子戸が立てられたりした。或る時入口に靴の脱いであるのを見た。それから間もなく、この家の戸口に新しい標札ひょうさが打たれたのを見ると、巡查何なにがしの何某と書いてあつた。末造は松永町から、仲徒町ななかちまちへ掛けて、色々な買物をして廻る間に、又探るともなしに、飴屋じの爺いさんの

内へ婿入のあつた事を慥めた。標札にあつた巡査がその婿なのである。お玉を目の球よりも大切にしていた爺いさんは、こわい顔のおまわりさんに娘を渡すのを、天狗にでも撈さらわれるように思い、その婿殿が自分の内へ這入り込んで来るのを、この上もなく窮屈に思つて、平生心安くする誰たれ彼かれに相談したが、一人もことわつてしまえとはつきり云つてくれるものがなかつた。それ見た事か。こつちとらが宜い所へ世話をしようと言うのに、一人娘だから出されぬのなんのと、面倒な事を言つていて、とうとうそんなことわり憎い婿さんが来るようになったと言うものもある。お前方の方で厭いやなのなら、遠い所へでも越すより外あるまいが、相手がおまわりさんで見ると、すぐにどこへ越したと言うことを調べて、その先へ掛け合うだろうから、どうも逃げ果せることは出来まいと、威おどすように云うものもある。中にも一番物分かりの好いと云う評判のお上さんの話がこうだ。「あの子はあんな好い器量で、お師匠さんも芸が出来そうだと云つて褒めてお出いでだから、早く芸者の下地したじ子にお出しと、わたしがそう云つたじゃありませんか。一人もののおまわりさんと来た日には、一軒一軒見て廻るのだから、子柄の好いのを内に置くと、いやおうなしに連れて行つてしまいなさる。どうもそう云う方に見込まれたのは、不運だとあきらめるより外、為しかた方がないね」と云うような事を言つたそうだ。末造がこの噂を聞いてから、やつと

三月ばかりも立つた頃であつただろう。飴細工屋の爺いさんの家に、或る朝戸が締まつていて、戸に「貸屋差配松永町西のはずれにあり」と書いて張つてあつた。そこで又近所の噂を、買物の序ついでに聞いて見ると、おまわりさんには国に女房も子供もあつたので、それが出し抜けに尋ねて来て、大騒ぎをして、お玉は井戸へ身を投げると云つて飛び出したのを、立聞をしていた隣の上さんがようよう止めたと云うことであつた。おまわりさんが婿に來ると云う時、爺いさんは色々の人に相談したが、その相談相手うちの中には一人も爺いさんの法律顧問になつてくれるものがなかつたので、爺いさんは戸籍がどうなつてゐるやら、どんな届がしてあるやら一切無頓着むとんじやくでいたのである。巡査が髭ひげを拈ひねつて、手続は万事おれ己おれがするから好いと云うのを、少しも疑わなかつたのである。その頃松永町の北角きたすみと云う雜貨店に、色の白い円顔で腮あこの短い娘がいて、学生は「願あこなし」と云つていた。この娘が末造にこう云つた。「本当にたあちゃんは可哀そうでございますわねえ。正直な子だもんですから、全くなのお婿さんだと思つていたのに、おまわりさんの方では、下宿したような積つもりになつていたと云うのですもの」と云つた。坊主頭の北角の親爺が傍そばから口を出した。

「爺いさんも氣の毒ですよ。町内のお方にお恥かしくて、このままにしてはいられないと云つて、西鳥越にしとりごえの方へ越して行きましたよ。それでも子供衆のお得意のある所でなくて

は、元の商売が出来ないと云うので、秋葉の原へは出ているそうです。屋台も一度売ってしまつて、佐久間町の古道具屋の店に出ているのを、わけを話して取り返したと云うことです。そんな事やら、引越やらで、随分掛かつた筈ですから、さぞ困つていますでしょう。おまわりさんが国の女房や子供を干し上げて置いて、大きな顔をして酒を飲んで、上戸でもない爺いさんに相手をさせていた間、まあ、一寸楽隠居になつた夢を見たようなものですね」と、頭をつるりと撫でて云つた。それから後、末造は飴屋のお玉さんの事を忘れていたのに、金が出来て段々自由が利くようになったので、ふいと又思い出したのである。今では世間の広くなつてゐる末造の事だから、手を廻して西鳥越の方を尋ねさせて見ると、柳盛座の裏の車屋の隣に、飴細工屋の爺いさんのいるのを突き留めた。お玉も娘でいた。そこで或る大きい商人が妾に欲しいと云うがどうだと、人を以て掛け合つと、最初は妾になるのはいやだと云つていたが、おとなしい女だけに、とうとう親の為めだと云うので、松源で檀那にお目見えをすると云う処まで話が運んだ。

金の事より外、何一つ考えたことのない末造も、お玉のありかを突き留めるや否や、まだ先方が承知するかせぬか知れぬうちに、自分で近所の借家を捜して歩いた。何軒も見ただ中で、末造の気に入った店が二軒あった。一つは同じ池の端で、自分の住まっている福地源一郎の邸宅の隣と、その頃名高かった蕎麦屋の蓮玉庵との真ん中位の処で、池の西南の隅から少し蓮玉庵の方へ寄った、往来から少し引つ込めて立てた家である。四つ目垣の内に、高野槇が一本とちやば檜葉が二三本と植えてあって、植木の間から、竹格子を打った肘懸窓が見えている。貸家の札が張つてあるので這入つて見ると、まだ人が住んでいて、五十ばかりの婆あさんが案内をして中を見せてくれた。その婆あさんが問わずがたりに云うには、主人は中国辺の或る大名の家老であったが、廃藩になってから、小使取りに大蔵省の属官を勤めている。もう六十幾つとかになるが、綺麗好きで、東京中を歩いて、新築の借家を捜して借りるが、少し古びて来ると、すぐ引き越す。勿論子供は別になつてしまつてから久しくなるので、家を荒すような事はないが、どうせ住んでいるうちに古くなるので、障子の張替もしなくてはならず、畳の表も換えなくてはならない。そんな面倒をなるたけせぬようにして、さっさと引き越すのだと云うのである。婆あさんはそれが厭でならぬので、知らぬ人にも夫の壁訴訟をする。「この内なんぞもまだこんなに綺麗

なのに、もう越すと申すので「ごさいますよ」と云つて、内じゆうを細かに見せてくれた。どこからどこまで、かなり綺麗に掃除がしてある。末造は一寸好いと思つて、敷金と家賃と差配の名とを、手帳に書き留めて出た。

今一つは無縁坂の中程にある小家である。それは札も何も出ていなかったが、売りに出たのを聞いて見に行つた。持主は湯島切通しの質屋で、その隠居がついこの間まで住んでいたのが亡くなつたので、婆あさんは本店へ引き取られたと云うのである。隣が裁縫の師匠をしているので、少し騒がしいが、わざわざ隠居所に木なんぞを選んで立てたものゆえ、どことなく住心地が好さそうである。入口の格子戸から、花崗石を塗り込めた敲きの庭まで、小ざつぱりと奥床しげに出来ている。

末造は一晩床の上に寝転んで、二つの中どれにしようかと考えた。傍には女房が子供を寐かそうと思つて、自分も一しよに寐入つてしまつて、大きな口を開いて、女らしくない軒をしている。亭主が夜、貸金の利廻しを考えて、いつまでも眠らずにいるのは常の事なので、女房は何時まで亭主が目を開いていようが、少しも気になんぞはせぬのである。末造は腹のうちで可笑しくてたまらない。考えつつ女房の顔を見て、こう思つた。「まあ、同じ女でもこんな面をしているのもある。あのお玉はだいぶ久しく見ないが、あの時はま

だ子供上がりであったのに、おとなしい中に意気な処のある、震い附きたいような顔をしていた。さぞこの頃は女振を上げているだろうな。顔を見るのが楽しみだな。かかあ奴め。平気で寐てけつかる。己だつて、いつも金のことばかり考えているのだと思うと、大違いだぞ。おや。もう蚊が出やがった。下谷はこれだから厭だ。そろそろ蚊屋かやを吊つらなくちやあ、かかあは好いいが、子供が食われるだろう」こんな事を思つては、又家の事を考えて見る。どうか、どうか断案に到着したらしく思つたのは、一時過ぎであつた。それはこうである。「あの池の端の家は、人は見晴しがあつて好いなんぞと云うかも知れないが、見晴しはこの家で沢山だ。家賃が安いが、借家となると何やかや手が掛かる。それになんとなく開け広げたような場所で、人の目に着きそうだ。うっかり窓でもあけていて、子供を連れて仲町へ出掛けるかかあにでも見られようものなら面倒だ。無縁坂の方は陰気なようだが、学生が散歩に出て通る位より外に、人の余り通らない処になつてゐる。一時に金を出して買うのはおつくうなようだが、木道具の好いのが使つてあるわりに安いから、保険でも附けて置けばいつ売ることになつても元値は取れると思つて安心していられる。無縁坂にしよ、しよう。己が夕方にでもなつて、湯にでも行つて、気の利いた支度をして、かかあに好い加減な事を言つて、だまくらかして出掛けるのだな。そしてあの格子戸を開けて、ず

っと這入って行ったら、どんな塩梅あんばいだろう。お玉の奴め。猫か何かを膝ひざにのっけて、さ
 びしがって待っていやがるだろうなあ。勿論お作りをして待っているのだ。着物なんぞは
 どうでもして遣やる。待てよ。馬鹿な錢を使つてはならないぞ。質流れにだつて、立派なも
 のがある。女一人に着物や頭の物の贅ぜいたく沢たくをさせるには、世間の奴のするような、馬鹿を
 尽さなくても好い。隣の福地さんなんぞは、己の内より大きな構かまえをしていて、数寄屋町の
 芸者を連れて、池の端をぶら附いて、書生さんを羨うらやましがらせて、好い氣になつていなさ
 るが、内証は火の車だ。学者が聞いてあきれらあ。筆ふで尖さきで旨うまい事をすりやあ、お店たなもの
 だつてお払箱にならあ。おう、そうそう。お玉は三味線が弾けたつけ。爪つめ弾びきで心意氣で
 も聞かせてくれるようだといが、巡查の上さんになつたより外に世間を知らずにいるの
 だから、駄目だろうなあ。お笑いなさるからいやだわとか、なんとか云つて、弾けと云つ
 ても、なかなか弾かないだろうて。ほんになんに附けても、はにかみやあがるだろう。顔
 を赤くしてもじもじするに違ちがひない。己が始て行つた晩には、どうするだろう「空想は縦
 横ちへいに馳騁ちへいして、底止する所を知らない。かれこれするうち、想像が切れ切れになつて、白
 い肌がちらつく。唄うたきが聞える。未造は好い心持に寐入せつてしまった。傍たもとに上さんは相変
 らず軒のきをしている。

陸

松源の目見えと云うのは、末造が為めには一の〔feve〕《フェエト》であつた。一口に爪に火を点すなどとは云うが、金を溜める人にはいろいろある。細かい所に気を付けて、塵紙を二つに切つて置いて使つたり、用事を葉書で済ますために、顕微鏡がなくては読まれぬような字を書いたりするのは、どの人にも共通している性質だろうが、それを絶待的に自己の生活の全範囲に及ぼして、真に爪に火を点す人と、どこかに一つ穴を開けて、息を抜くようにしている人がある。これまで小説に書かれたり、芝居に為組まれたりしている守銭奴は、殆ど絶待的な奴ばかりのようである。活きた、金を溜める男には、實際そうでないのが多い。吝な癖に、女には目がないとか、不思議に食奢だけはするとか云うのがそれである。前にもちよつと話したようであつたが、末造は小綺麗な身なりをするのが道楽で、まだ大学の小使をしていた時なんぞは、休日になると、お定まりの小倉の筒袖を脱ぎ棄てて、気の利いた商人らしい着物に着換えるのであつた。そしてそれを一種の楽みにしていた。学生どもが稀に唐棧ずくめの末造に邂逅して、びっくりすること

のあつたのは、こうしたわけである。そこで末造には、この外にこれと云う道楽がない。芸娼妓なんぞに掛かり合つたこともなければ、料理屋を飲んで歩いたこともない。蓮玉で蕎麦を食う位が既に奮発の一つになつていて、女房や子供は余程前まで、こう云う時連れて行つて貰うことが出来なかつた。それは女房の身なりを自分の支度に吊り合うようにはしてゐなかつたからである。女房が何かねだると、末造はいつも「馬鹿を言うな、手前なんぞは己とは違ふ、己は附合があるから、為方なしにしているのだ」と云つて撥ね附けたのである。その後のちだ**いぶ**金が子を生んでからは、末造も料理屋へ出這入ではいりすることがあつたが、これはおお勢の寄り合う時に限つていて、自分だけが客になつて行くのではなかつた。それがお玉に目見えをさせると云うことになつて、ふいと晴がましい、solemn 《ソランネル》な心持になつて、目見えは松源にしようと云い出したのである。

さていよいよ目見えをさせようとなつた時、避くべからざる問題が出来た。それはお玉さんの支度である。お玉さんのばかりなら好いいが、爺いさんの支度までして遣らなくてはならないことになつた。これには中に立つて口を利いた婆あさんも頗すこぶ窮したが、爺いさんの云うことは娘が一も二もなく同意するので、それを強いて抑えようとすると、根本的に談判が破裂しないにも限らぬと云う状況になつたから為方がない。爺いさんの申分はぎ

つとこうであつた。「お玉はわたしの大事な一人娘で、それも余所の一人娘とは違って、わたしの身よりと云うものは、あれより外には一人もない。わたしは亡くなつた女房一人をたよりにして、寂しい生涯を送つたものだが、その女房が三十を越しての初産でお玉を生んで置いて、とうとうそれが病附で亡くなつた。貫乳をして育てていると、やつと四月ばかりになつた時、江戸中に流行つた麻疹になつて、お医者が見切つてしまつたのを、わたしは商売も何も投遣にして介抱して、やつと命を取り留めた。世間は物騒な最中で、井伊様がお殺されなすつてから二年目、生麦で西洋人が斬られたと云う年であつた。それからと云うものは、店も何もなくなつてしまつたわたしが、何遍もいつその事死んでしまおうかと思つたのを、小さい手でわたしの胸をいじつて、大きい目でわたしの顔を見て笑う、可哀いお玉を一しよに殺す氣になられないばかりに、出来ない我慢をして一日々々と命を繋いでいた。お玉が生れた時、わたしはもう四十五で、お負に苦勞をし続けて年より更けていたのだが、一人口は食えなくても二人口は食えるなどと云つて、小金を持つた後家さんの所へ、入増に世話をしよう、子供は里にでも遣つてしまえと、親切に云つてくれた人もあつたが、わたしはお玉が可哀さに、そつけもなくことわつた。それまでにして育てたお玉を、貧すれば鈍するとやら云うわけで、飛んだ不実な男の慰

物にせられたのが、悔やしくて悔やしくてならないのだ。為合せしあわな事には、好い娘だと人も云つて下さるあの子だから、どうか堅気な人に遣りたいと思つても、わたしと云う親があるのです、誰も貰おうと云つてくれぬ。それでも困物や妾には、どんな事があつても出すまいと思つていたが、堅い檀那だと、お前さんが仰おつしやるから、お玉も来年は二十はたちになるし、余り臺とうの立たないうちに、どうかして遣りたさに、とうとうわたしは折れ合つたのだ。そうした大事なお玉を上げるのだから、是非わたしが一しよに出て、檀那にお目に掛からなくてはならぬ」と云うのである。

この話を持ち込まれた時、末造は自分の思わくの少し違つて来たのを慊あきたらず思つた。それはお玉を松源へ連れて来て貰つたら、世話をする婆あさんをなるだけ早く帰してしまつて、お玉と差向いになつて楽もうと思つたあてがはずれそうになつたからである。どうも父親が一しよに来るとなると、意外に晴がましい事になりそうである。末造自身も一種の晴がましい心持はしているが、それはこれまで抑え抑えて来た慾望いましめの縛を解く第一歩を踏み出そうと云う、門出かしてのよろこびの意味で、[te-ve-a-te-ve] 《テタテト》はそれには第一要件になつていた。ところがそこへ親父が出て来るとなると、その晴がましきの性質がまるで變つて来る。婆あさんの話に聞けば、親子共物堅い人間で、最初は妾奉公は厭だと云つ

て、二人一しよになつてことわつたのを、婆あさんが或る日娘を外へ呼んで、もう段々稼がれなくなるお父っさんに樂がさせたくはないかと云つて、いろいろに説き勧めて、とうとう合点させて、その上で親父に納得させたと云うことである。それを聞いた時は、そんな優しい、おとなしい娘を手に入れることが出来るのかと心中窃かに喜んだのだが、それ程物堅い親子が揃つて来るとなると、松源での初対面はなんとなく婿が岳父に見参すると云う風になりそうなので、その方角の変つた晴がましきは、末造の熱した頭に一杓の冷水を浴せたのである。

しかし末造は飽くまで立派な実業家だと云う觸込を實にしなくてはならぬと思つていたので、先方へはおお様な処が見せたさに、とうとう二人の支度を引き受けた。それにはお玉を手に入れた上では、どうせ親父の身の上も棄てては置かれぬのだから、只後ですることが先になるに過ぎぬと云う諦めも手伝つて、末造に決心させたのである。

そこで当^{あたりまえ}前^{まへ}なら支度料幾らと云つて、纏^{まと}まつた金を先方へ渡すのであるが、末造はそうはしない。身なりを立派にする道楽のある末造は、自分だけの為^{したてもの}立物をさせる家がある^{あつち}ので、そこへ事情を打ち明けて、似附かわしい二人の衣類を誂えた。只寸法だけを世話を頼んだ婆あさんの手でお玉さんに問わせたのである。気の毒な事には、この油断のな

い、吝けちな末造の処置を、お玉親子は大そう善意に解釈して、現金を手に渡されぬのを、自分達が尊敬せられているからだと思つた。

漆しち

上野広小路は火事の少い所で、松源の焼けたことは記憶にないから、今もその座鋪ざしきがあるかも知れない。どこか静かな、小さい一間をと誂えて置いたので、南向の玄関から上がつて、真つ直に廊下を少し歩いてから、左へ這入る六畳の間に、末造は案内せられた。

印しるし絆ばん纏てん

を着た男が、渋紙の大きな日覆ひおいを巻いている最中であつた。

「どうも暮れてしまいますまでは夕日が入いれますので」と、案内をした女中が説明をして置いて下がった。真偽の分からぬ肉筆の浮世絵の軸物を掛けて、一輪挿いちりんさしに山くちなし梔なの花を活けた床の間を背にして座を占めた末造は、鋭い目であたりを見廻した。

二階と違つて、その頃からずつと後のちに、殺風景にも競馬の埒らちにせられて、それから再び滄そう桑そうを閱けみして、自転車の競走場になつた、あの池の縁ふちの往来から見込まれぬようにと、切角せつかくの不忍の池に向いた座敷の外は籠かご堀ほりで囲んである。堀と家との間には、帯のよう

に狭く長い地面があるきりなので、固もとより庭と云う程の物は作られない。末造の据わっている所からは、二三本寄せて植えた梧あおぎり桐りの、油雑巾で拭いたような幹が見えている。それから春日燈籠かすがどうろうが一つ見える。その外ほかには飛び飛びに立っている、小さい側栢ひのきがあるばかりである。暫しばらく照り続けて、広小路は往来の人の足許あしもとから、白い土つちけぶり 烟けが立つのに、この塀うちの内は打水うちをした苔こけが青々としている。

間もなく女中が蚊遣かやりと茶を持って来て、注文を聞いた。末造は連れが来てからにしようと思つて、女中を立てせて、ひとり烟草たばこを呑のんでいた。初め据わった時は少し熱いように思つたが、暫く立つと台所や便所あたりの辺を通つて、いろいろの物の香を、微かすかに帯びた風が、廊下の方から折々吹いて来て、傍そばに女中の置いて行つた、よごれた団扇うちわを手取るには及ばぬ位であつた。

末造は床の間の柱に寄り掛かつて、烟草けぶりの烟を輪に吹きつつ、空想に耽ふけつた。好い娘だと思つて見て通つた頃のお玉は、なんと云つてもまだ子供であつた。どんな女になつただろう。どんな様子をして来るだろう。とにかく爺いさんが附いて来ることになつたのは、いかにもまづかつた。どうにかして爺いさんを早く帰してしまふことは出来ぬか知らんなんぞと思つている。二階では三味線の調子を合せはじめた。

廊下に二三人の足音がして、「お連様が」と女中が先へ顔を出して云った。「さあ、ずっとお這入なさいよ。檀那はさばけた方だから、遠慮なんぞなさらないが好い」くつわむし 轡虫の鳴くような調子でこう云うのは、世話をしてくれた、例の婆あさんの声である。

末造はつと席を起たつた。そして廊下に出て見ると、腰を屈かがめて、曲角の壁際に躡ちゆう躡うちよしている爺いさんの背後うしろに、怯おくれた様子もなく、物珍らしそうにあたりを見て立っているのがお玉であった。ふつくりした円顔の、可哀らしい子だと思つていたに、いつの間にか細面になつて、体も前よりはすなりとしている。さつぱりとした銀杏いちじやうがえ返しに結いつて、こんな場合に人のする厚化粧なんぞはせず、殆ど素顔と云つても好よい。それが想像していたとは全く趣が變つていて、しかも一層美しい。末造はその姿を目に吸い込むように見て、心の内に非常な満足を覚えた。お玉の方では、どうせ親の貧苦を救うために自分を売るのでから、買手はどんな人でも構わぬと、捨身の決心で来たのに、色の浅黒い、鋭い目に愛あ敬いきやうのある末造が、上品な、目立たぬ好みの支度をしているのを見て、捨てた命を拾つたように思つて、これも刹那せつなの満足を覚えた。

末造は爺いさんに、「ずっとあつちへお通りなすつて下さい」と丁寧に云つて、座鋪の方を指さしながら、目をお玉さんの方へ移して、「さあ」と促した。そして二人を座鋪へ

入れて置いて、世話をする婆あさんを片蔭へ呼んで、紙に包んだ物を手に握らせて、何やら呟いた。婆あさんはお齒黒を剥がした痕のきたない歯を見せて、恭しいような、人を馬鹿にしたような笑いようをして、頭を二三遍屈めて、そのまま跡へ引き返して行つた。

座舗に帰つて、親子のものの遠慮して這入口に一塊ひとかたまりになつてゐるのを見て、末造は愛想あいそ好く席を進めさせて、待つていた女中に、料理の注文をした。間もなく「おとし」を添えた酒が出たので、先ず爺いさんに杯さかずきを侑めて、物を言つて見ると、元は相応な暮しをしただけあつて、遽こじわかに身なりを拵こしらへて座敷へ通つた人のようではなかつた。

最初は爺いさんを邪魔にして、苛いらいら々したような心持になつていた末造も、次第に感情を融和させられて、全く預想よそうしなかつた、しんみりした話をする事になつた。そして末造は自分の持つてゐる限のあらゆる善良な性質を表へ出すことを努めながら、心の奥には、おとなしい気立の、お玉に信頼する念を起さしめるには、この上もない、適当な機会が、偶然に生じて来たのを喜んだ。

料理が運ばれた頃には、一座はなんとなく一家のものが遊山ゆうざんにでも出て、料理屋に立ち寄つたかと思われるような様子になつていた。平生妻子に対しては、Tyran《チラン》のよ様な振舞をしてゐるので、妻からは或るときは反抗を以て、或るときは屈従を以て遇せ

られている末造は、女中の立った跡で、恥かしさに赤くした顔に、つつましやかな微笑を湛たえて酌をするお玉を見て、これまで覚えたことのない淡い、地味な歓楽を覚えた。しかし末造はこの席で幻のように浮かんだ幸福の影を、無意識に直覚よそゆきしつつも、なぜ自分の家庭生活にこう云う味が出ないかと反省したり、こう云う余所行よそゆきの感情を不断に維持するには、どれだけの要約があるか、その要約が自分や妻に充たされるものか、充たされないものかと商量したりする程の、緻密ちみつな思慮は持つていなかった。

突然扉の外に、かちかちと拍子木を打つ音がした。続いて「へい、何か一枚御鼻ごひいきさま様を」と云った。二階にしていた三味線の音が止まって、女中が手摩てすりに掴つかまって何か言っている。下では、「へい、さようなら成田屋の河内山こうちやまと音羽屋おとわやの直なお侍むらいを一つ、最初は河内山」と云つて、声色こわいろを使いはじめた。

銚子ちようしを換えに来ていた女中が、「おや、今晚のは本当のでございます」と云った。末造には分からなかった。「本当ののだの、嘘うそのだのと云つて、色々ありますかい」

「いえ、近頃は大学の学生さんが遣つてお廻りになります」

「失や張はり鳴物入で」

「ええ。支度から何からそっくりでございます。でもお声で分かります」

「そんなら極きまった人ですね」

「ええ。お一人しか、なさる方はございません」女中は笑っている。

「姉ねえさん、知っているのだね」

「こちらへもちよいちよいいらつしやつた方だもんですから」

爺いさんが傍そばから云った。「学生さんにも、御器用な方があるものですね」

女中は黙っていた。

末造が妙に笑った。「どうせそんなのは、学校では出来ない学生なのですよ」こう云つて、心の中うちには自分の所へ、いつも来る学生共の事を考えている。中には随分職人の真似をして、小店と云う所を冷かすのが面白いなどと云つて、不断も職人のような詞ことば遣つかをしていながらある。しかしまさか真面目に声色を遣つて歩く人があろうとは、末造も思つていなかったのである。

一座の話を黙つて聞いているお玉を、末造がちよつと見て云った。

「お玉さんは誰が鼻はな真まですか」

「わたくし鼻はな真まなんかございませんの」

爺いさんが詞を添えた。「芝居へ一向まいりませんのですから。柳盛座がじき近所なの

で、町内の娘さん達がみな覗のぞきにまいましたも、お玉はちつともまいません。好きな娘さん達は、あのどんちゃんどんちゃんが聞えては内にじつとしてはいられませんそうで」
爺いさんの話は、つい娘自慢になりたがるのである。

捌はち

話が極まって、お玉は無縁坂へ越して来ることになった。

ところが、末造がひどく簡単に考えていた、この引越ひきこしにも多少の面倒が付き纏った。

それはお玉が父親をなると近い所に置いて、ちよいちよい尋ねて行って、気を付けて上げようになりたいと云い出したからである。最初からお玉は、自分が貰う給金の大部分を割いて親に送って、もう六十を越している親に不自由のないように、小女こおんなの一人位附けて置こうと考えていた。そうするには、今まで住まった鳥越の車屋と隣合せになっている、見苦しい家に親を置かなくても好いい。同じ事なら、もつと近い所へ越させたいと云うことになった。丁度見合いに娘ばかり呼ぶ筈の所へ、親爺が来るようになったと同じわけで、末造は妾しょうたく宅の支度をしてお玉を迎えさえすれば好いいと思っていたのに、実際は親子二

人の引越をさせなくてはならぬ事になったのである。

勿論^{もちろん}お玉は親の引越は自分が勝手にさせるのだから、一切檀那に迷惑を掛けないようにしたいと云っている。しかし話を聞^{きか}せられて見れば、末造もまるで知らぬ顔をしていることは出来ない。見合いをして一層気に入^いったお玉に、例の気前を見せて遣^やりたい心持が手伝^てつて、とうとうお玉が無縁坂へ越すと同時に、兼て末造が見て置いた、今一軒の池の端の家へ親爺も越すということになった。こう相談相手になつて見れば、幾らお玉が自分の貰^{もら}う給金の内で万事済ましたいと云つたと云つて、見ず見ず苦しい事をするの知らぬ顔は出来ず、何かにつけて物入がある。それを末造が平気で出すのに、世話を焼いている婆あさんの目を睜^{みは}ることが度々であつた。

両方の引越騒ぎが片附いたのは、七月の中頃でもあつたか。ういういしい詞遣や立居振舞が、ひどく気に入つたと見えて、金貸業の方で、あらゆる峻^{しゅんれつ}烈な性分を働かせている末造が、お玉に対しては、柔和な手段の限を尽して、毎晩のように無縁坂へ通つて来て、お玉の機嫌を取つていた。ここにはちよつと歴史家の好く云う、英雄の半面と云つたような趣がある。

末造は一夜も泊つて行かない。しかし毎晩のように来る。例の婆あさんが世話をして、

梅と云う、十三になる小女を一人置いて、台所で子供の飯事ままごとのような真似をさせているだけなので、お玉は次第に話相手のない退屈を感じて、夕方になれば、早く檀那が来てくれれば好いと待つ心になつて、それに気が附いて、自分で自分を笑うのである。鳥越にいた時も、お父さんが商売に出た跡で、お玉は留守に独りで、内職をしていたが、もうこれだけ為上げれば幾らになる、そうしたらお父さんが帰つて驚くだろうと励んでいたのだ、近所の娘達と親しくしないお玉も、退屈だと思つたことはなかつたのである。それが生活の上の苦勞がなくなると同時に、始て退屈と云うことを知つた。

それでもお玉の退屈は、夕方になると、檀那が来て慰めてくれるから、まだ好い。可笑しいのは、池の端へ越した爺いさんの身の上で、これも渡世に追われていたのが、急に樂になり過ぎて、自分でも狐きつねに撮つままれたようだと思つている。そして小さいランプの下したで、これまでお玉と世間話をして過した水入らずの晩が、過ぎ去つた、美しい夢のように恋しくてならない。そしてお玉が尋ねて来そうなものだと、絶えずそればかり待つている。ところがもう大分日だいぶんが立つたのに、お玉は一度も来ない。

最初一日二日の間、爺いさんは綺麗きれいな家に這入つた嬉しさに、田舎出の女中には、水みずく汲みや飯炊めしたきだけさせて、自分で片附けたり、掃除をしたりして、ちよいちよい足らぬ物

のあるのを思い出しては、女中を仲町へ走らせて、買って来させた。それから夕方になると、女中が台所でことごと音をさせているのを聞きながら、肘掛窓ひしかけまどの外の高野槇こうやまぎの植えてある所に打水をして、煙草を喫みながら、上野の山で鴉からすが騒ぎ出して、中島の弁天の森や、蓮はすの花の咲いた池の上に、次第に夕靄ゆうみやが漂つて来るのを見ていた。爺いさんは難ありがた、結構だとは思っていた。しかしその時から、なんだか物足らぬような心持がし始めた。それは赤子の時から、自分一人の手で育てて、殆ど物を言わなくても、互に意志を通じ得られるようになっていたお玉、何事につけても優しくしてくれたお玉、外から帰つて来れば待つていてくれたお玉がいぬからである。窓に据わつていて、池の景色を見る。往來の人を見る。今跳ねたのは大きな鯉であつた。今通つた西洋婦人の帽子には、鳥が一羽丸で附けてあつた。その度毎に、「お玉あれを見い」と云いたい。それがいないのが物足らぬのである。

三日四日となつた頃には、次第に気が苛々して来て、女中の傍へ来て何かするのが氣に障る。もう何十年か奉公人を使つたことがないのに、原がんらい来らい優しい性分だから、小言は言わない。只女中のする事が一々自分の意志に合わぬので、不平でならない。起居たちいのおとなしい、何をしても物に柔やわらかに当るお玉と比べて見られるのだから、田舎から出たばかりの女

中こそ好い迷惑である。とうとう四日目の朝飯の給事をさせている時、汁椀の中へ梅おやゆ指びを突つ込んだのを見て、「もう給仕はしなくても好いから、あっちへ行つておくれ」と云つてしまった。

食事をしまつて、窓から外を見てみると、空は曇つていても、雨の降りそうな様子もなく、却かえつて晴れた日よりは暑くなくて好きそうなので、気を晴そうと思つて、外へ出た。それでも若し留守にお玉が来はすまいかと氣遣つて、我家の門かどぐち口を折々振り返つて見つ、池の傍そばを歩いている。そのうち茅かやちよう町と七軒しちけんちよう町との間から、無縁坂の方へ行く筋に、小さい橋の掛つてゐる処ところに来た。ちよつと娘の内へ行つて見ようかと思つたが、なんだか改まつたような氣がして、我ながら不思議な遠慮がある。これが女親であつたら、こんな隔てはどんな場合にも出来まいのに、不思議だ、不思議だと思ひながら、橋を渡らずに、矢張池の傍を歩いている。ふと心附くと、丁度末造の家が溝とびの向うにある。これは口入くちいれの婆あさんが、こんで越して来た家の窓から、指さしをして教えてくれたのである。見れば、なる程立派な構かまえで、高い土塀の外廻に、殺竹そぎだけが斜ななめに打ち附けてある。福地さんと云う、えらい学者の家だと聞いた、隣の方は、広いことは広いが、建物も古く、こつちの家に比べると、けばけばしい所と嚴いめしげな所とがない。暫く立ち留まつて、昼も嚴重

に締め切つてある、白木造の裏門の扉を見ていたが、あの内へ這入つて見たいと思ふ心は起らなかつた。しかし何をどう思うでもなく、一種のはかない、寂しい感じに襲われて、暫く茫然としていた。詞にあらわして言つたら、落ちぶれて娘を妾に出した親の感じでも云うより外あるまい。

とうとう一週間立つても、まだ娘は来なかつた。恋しい、恋しいと思ふ念が、内攻するように奥深く潜んで、あいつ楽な身の上になつて、親の事を忘れたのではあるまいかと云う疑が頭を擡げて来る。この疑は仮に故意に起して見て、それを弄んでいるとでも云うべき、極めて淡いもので、疑いは疑いながら、どうも娘を憎く思われぬ。丁度人に対して物を言う時に用いる反語のように、いつそ娘が憎くなつたら好かろうと、心の上辺で思つて見るに過ぎない。

それでも爺いさんはこの頃になつて、こんな事を思ふことがある。内にばかりいると、いろいろな事を思つてならないから、己はこれから外へ出るが、跡へ娘が来て、己に逢われないのを残念がるだろう。残念がらないにしたところが、切角来たのが無駄になつただけだ。けは思うに違いない。その位な事は思わせて遣つても好い。こんな事を思つて出て行くようになったのである。

上野公園に行つて、丁度日蔭ひかげになつてゐる、ろは台を尋ねて腰を休めて、公園を通り抜ける、母衣ほろを掛けた人力車を見ながら、今頃留守へ娘が来て、まごまごしてはいはしないかと想像する。この時の感じは、好い気味だと思つて見たいと云う、自分で自分を験ためして見るような感じである。この頃は夜も吹抜亭ふきぬきていへ、円朝の話や、駒之助こまのすけの義太夫ぎだゆうを聞きに行くことがある。寄席にいても、矢張娘が留守に来てゐるだらうかと云う想像をする。そうかと思つと又ふいと娘がこの中に来ていはせぬかと思つて、銀杏返しいに結いつてゐる、若い女を選び出すようにして見ることなどがある。一度なんぞは、中入なかいりが済んだ頃、その時代にまだ珍らしかつた、パナマ帽を目深かぶに被かつた、湯帷子ゆかた掛かけの男に連れられて、背後うしろの二階へ来て、手摩つかに攫つかまつて据つわりしなに、下の客を見卸した、銀杏返しの女を、一刹いっせつ那なの間お玉だと思つた事がある。好く見れば、お玉よりは顔が円くて背が低い。それにパナマ帽の男は、その女ばかりではなく、背後うしろにまだ三人ばかりの島田やら桃割ももわれやらを連れていた。皆芸者やお酌であつた。爺いさんの傍そばにいた書生が、「や、吾曹先生ごそうが来た」と云つた。寄席がはねて帰る時に見ると、赤く「ふきぬき亭」と斜ななめに書いた、大きい柄の長い提灯ちようちんを一人の女が持つて、芸者やお酌がぞろぞろ附いて、パナマ帽の男を送つて行く。爺いさんは自分の内の前まで、この一行と跡になつたり、先になつたりして歸つた。

玖く

お玉も小さい時から別れていたことのない父親が、どんな暮らしをしているか、往いつて見たいとは思っている。しかし檀那だんなが毎日のように来るので、若し留守を明けていて、機嫌を損じてはならないと云う心配から、一日一日と、思いながら父親の所へ尋ねて行かずに過すのである。檀那は朝までいることはない。早い時は十一時頃に帰ってしまう。又きようは外ほかへ行かなくてはならぬのだが、ちよいと寄つたと云つて、箱火鉢の向うに据わつて、烟草を呑んで帰ることもある。それでもきようは檀那がきつと来ないと見極めの附いた日というのがないので、思い切つて出ることが出来ない。昼間出れば出られぬことはない筈だが、使っている小女が子供と云つても好い位だから、何一つ任せて置かれぬ。それになんとか近所のものに顔を見られるような気がして、昼間は外へ出たくない。初のうちは坂下の湯に這入りに行くにも、今頃は透とおいているか見て来ておくれと、小女に様子を見て来させた上で、そつと行つた位である。

何事もなくても、こんな風に怯おそれがちなお玉の胆きもをとりひしいだが、越して来てから

三日目にあつた。それは越した日に八百屋も、肴屋も通帳を持って来て、出入を頼んだのに、その日には肴屋が来ぬので、小さい梅を坂下へ遣つて、何か切身でも買って来させようとした時の事である。お玉は毎日肴なんぞが食いたくはない。酒を飲まぬ父が体に障らぬお数でさえあれば、なんでも好いと云う性だから、有り合せの物で御飯を食べる癖が附いていた。しかし隣の近い貧乏所帯で、あの家では幾日立つても生腥氣も食べぬと云われた事があつたので、若し梅なんぞが不満足に思つてはならぬ、それでは手厚くして下さる檀那に濟まぬというような心から、わざわざ坂下の肴屋へ見せに遣つたのである。ところが、梅が泣顔をして帰つて来た。どうしたかと問うと、こう云うのである。肴屋を見附けて這入つたら、その家はお内へ通を持つて来たのとは違つた家であつた。御亭主がないで、上さんが店にいた。多分御亭主は河岸から帰つて、店に置くだけの物を置いて、得意先きを廻りに出たのであろう。店に新しそうな肴が沢山あつた。梅は小鯔の色の好いのが一山あるのに目を附けて、値を聞いて見た。すると上さんが、「お前さんは見附けない女中さんだが、どこから買いにお出だ」と云つたので、これこれの内から来たと話した。上さんは急にひどく不機嫌な顔をして、「おやそう、お前さんお気の毒だが帰つてね、そうお云い、ここの内には高利貸の妾なんぞに売る肴はないのだから」と云つて、それきり

横を向いて、烟草を呑んで構い附けない。梅は余り悔やしいので、外の肴屋へ行く気もなくなつて、駈けて帰つた。そして主人の前で、気の毒そうに、肴屋の上さんの口上を、きれぎれに繰り返したのである。

お玉は聞いているうちに、顔の色が唇まで蒼くなつた。そして良久しく黙つていた。世馴れぬ娘の胸の中で、込み入つた種々の感情がChaos《カオス》をなして、自分でもその織り交ぜられた糸をほぐして見ることは出来ぬが、その感情の入り乱れたままの全体が、強い圧を売られた無垢の処女の心の上に加えて、体じゅうの血を心の臓に流れ込ませ、顔は色を失い、背中には冷たい汗が出たのである。こんな時には、格別重大でない事が、最初に意識せられるものと見えて、お玉はこんな事があつては梅がもうこの内にはいられぬと云うだろうかと思つた。

梅はじつと血色の亡くなつた主人の顔を見ていて、主人がひどく困つていと云うことだけは曉つたが、何に困つていのか分からない。つい腹が立つて帰つては来たが、午のお菜がまだないのに、このままにしているのは済まぬと云うことに気が付いた。さつき貰つて出て行つたお足さえ、まだ帯の間に挿んだきりで出さずにいるのであつた。「ほんとにあんな厭なお上さんでありやしなわ。あんな内のお肴を誰が買って遣るものか。もっと

先の、小さいお稲荷いなりさんのある近所に、もう一軒ありますから、すぐに行つて買つて来ましようね」慰めるようにお玉の顔を見て起ち上がる。お玉は梅が自分の身方になつてくれた、刹那の嬉しさに動かれて、反射的に微笑ほほえんで頷うなずく。梅はすぐばたばたと出て行つた。お玉は跡にそのまま動かずにいる。気の張はりが少し弛ゆるんで、次第に涌わいて来る涙が溢あふれそうになるので、袂たもとからハンカチーフを出して押えた。胸の内には只悔やしい、悔やしいと云う叫びが聞える。これがかの混沌こんとんとした物の発する声である。肴屋が売つてくれぬのが憎いとか、売つてくれぬような身の上だと知つて悔やしいとか、悲しいとか云うのでないことは勿論であるが、身を任せることになつてゐる末造が高利貸であつたと分かつて、その末造を憎むとか、そう云う男に身を任せてゐるのが悔やしいとか、悲しいとか云うのでもない。お玉も高利貸は厭なもの、こわいもの、世間の人に嫌われるものとは、仄ほのかに聞き知つてゐるが、父親が質屋の金しか借りたことがなく、それも借りたい金高きんだかを番頭が因業で貸してくれぬことがあつても、父親は只困ると云うだけで番頭を無理だと云つて怨んだこともない位だから、子供が鬼がこわい、お廻りさんがこわいのと同じように、高利貸と云う、こわいものの存ぞんざい在を教えられていても、別に痛切な感じは持つていない。そんなら何が悔やしいのだろう。

一体お玉の持つている悔やしいと云う概念には、世を怨み人を恨む意味が甚だ薄い。強いて何物をか怨む意味があるとするとするなら、それは我身の運命を怨むのだとしても云おうか。自分が何の悪い事もしていぬのに、余所よそから迫害を受けなくてはならぬようになる。それを苦痛として感ずる。悔やしいとはこの苦痛を斥さすのである。自分が人に騙だまされて棄てられたと思つた時、お玉は始て悔やしいと云つた。それからたつたこの間妾と云うものにならなくてはならぬ事になつた時、又悔やしいを繰り返した。今はそれが只妾と云うだけではなくて、人の嫌う高利貸の妾でさえあつたと知つて、きのうきよう「時間」の齒で咬かまれて角かどが剝つぶれ、「あきらめ」の水で洗われて色の褪さめた「悔やしさ」が、再びはつきりした輪廓りんかく、強い色彩をして、お玉の心の目に現われた。お玉が胸に鬱うっけつ結している物の本体は、強いて条理を立てて見れば先ずこんな物でもあろうか。

しばら暫くするとお玉は起つて押入を開けて、象皮賽ぞうひまがいの靴かばんから、自分で縫つた白金巾しろかなきんの前掛を出して腰に結んで、深い溜ためいき息を衝ついて台所へ出た。同じ前掛でも、絹のはこの女の爲めに、一種の晴着になつていて、台所へ出る時には掛けぬことにしてある。かれは湯帷ゆか子にさえ領えりあか垢あかの附くのを厭いとつて、鬢たほや鬚たほの障る襟の所へ、手拭てぬぐいを折り掛けて置く位である。

お玉はこの時もう余程落ち着いていた。あきらめはこの女の最も多く経験している心的作用で、かれの精神はこの方角へなら、油をさした機関のように、滑かに働く習慣になっている。

拾 じゆう

或る日の晩の事であつた。末造が来て箱火鉢の向うに据わつた。始ての晩からお玉はいつも末造の這入つて来るのを見ると、座布団を出して、箱火鉢の向うに敷く。末造はその上に胡坐を搔いて、烟草を飲みながら世間話をする。お玉は手持不沙汰なように、不斷自分のいる所において、火鉢の縁を撫でたり、火箸をいじったりしながら、恥かしげに、詞数 かず 少く受 うけ 答 こたえ をしている。その様子が火鉢から離れて据わらせたら、身の置所に困りはすまいかと思われるようである。火鉢と云う胸壁 むなかべ に拠つて、僅かに敵に当たっていると云つても好い位である。暫く話しているうちに、お玉はふと調子附いて長い話をする。それが大抵これまで父親と二人で暮していた、何年かの間に閲して来た、小さい喜怒哀楽に過ぎない。末造はその話の内容を聴くよりは、籠に飼つてある鈴虫の鳴くのをでも聞くよ

うに、可哀らしい嘖さえずりの声を聞いて、覚えす微笑む。その時お玉はふいと自分の饒舌しゃべつてい
るのに気が附いて、顔を赤くして、急に話を端折はしよつて、元の詞数の少い対話に戻つてしま
う。その総ての言語挙動が、いかにも無邪気で、或る向きには頗すこぶる鋭利な観察をすること
に慣れている末造の目で見れば、澄み切った水盤の水を見るように、隅々まで隠れる所も
なく見渡すことが出来る。こう云う差向いの味は、末造がためには、手足を働かせた跡で、
加減の好いい湯に這入つて、じつとして温あたまつているように愉快である。そしてこの味を味
うのが、末造がためには全く新しい経験に属するので、末造はこの家に通い始めてから、
猛獣が人に馴れるように、意識せずに一種の culture 《キユルチュウル》を受けているの
である。

それに三四日立つた頃から、自分が例の通りに箱火鉢の向うに胡坐を搔くと、お玉はこ
れと云う用もないに立ち働いたり何かして、とかく落ち着かぬようになったのに、末造は
段々気が附いて来た。はにかんで目を見合せぬようにしたり、返事を手間取らせたりする
ことは最初にもあつたが、今晚なんぞの素振には何か特別な仔細しさいがありそうである。

「おい、お前何か考えているね」と、末造が烟管きせるに烟草を詰めつつ云つた。

わざわざ片附けてあるような箱火鉢の抽斗ひきだしを、半分抜いて、捜すものもないのに、中

を見込んでいたお玉は、「いいえ」と云って、大きい目を末造の顔に注いだ。昔話の神秘は知らず、余り大した秘密なんぞをしまつて置かれそうな目ではない。

末造は覚え^{しか}ず覺めていた顔を、又覚え^{しか}ず晴やかにせずにはいられなかつた。「いいえじやあないぜ。困つちまう。どうしよう。どうしようと、ちゃんと顔に書いてあらあ」

お玉の顔はすぐに真つ赤になつた。そして姑^{しばら}く黙つている。どう言おうかと考える。細かい器械の運転が透き通つて見えるようである。「あの、父の所へ疾^とうから行つて見よう、行つて見ようと思つていながら、もう随分長くなりましたもんですから」

細かい器械がどう動くかは見えても、何をするかは見えない。常に自分より大きい、強い物の迫害を避けなくてはいられぬ虫は、mimicy 《ミミクリイ》を持つている。女は嘘を衝く。

末造は顔で笑つて、叱るような物の言^い様^{よう}をした。「なんだ。つい鼻の先の池の端に越して来ているのに、まだ行つて見ないでいたのか。向いの岩崎^{やしき}の邸^{やしき}の事なんぞを思えば、同じ内にいるようなものだぜ。今からだつて、行こうと思えば行けるのだが、まあ、あすの朝にするが好^いい」

お玉は火箸で灰をいじりながら、偷^{ぬす}むように末造の顔を見ている。「でもいろいろと思

つて見ますものですから」

「笑談しょうだん じゃないぜ。その位な事を、どう思つて見ようもないじゃないか。いつまでねんねえでいるのだい」こん度は声も優しかった。

この話はこれだけで済んだ。とうとうしまいには末造が、そんなにおつくうがるようなら、自分が朝出掛けて来て、四五町の道を連れて行つて遣ろうかななども云つた。

お玉はこの頃種々に思つて見た。檀那に逢つて、頼もしげな、氣の利いた、優しい様子を目の前に見て、この人がどうしてそんな、厭な商売をするのかと、不思議に思つたり、なんとか話をして、堅気な商売になつて貰うことは出来まいかと、無理な事を考えたりしていた。しかしまだ厭な人だとは少しも思わなかつた。

末造はお玉の心の底に、何か隠している物のあるのをかす微妙に認めて、探りを入れて見たが、子供らしい、なんでもない事だと云うのであつた。しかし十一時過ぎにこの家を出て、無縁坂をぶらぶら降りながら考へて見れば、どうもまだその奥に何物かが潜んでいそうである。末造の物馴れた、鋭い観察は、この何物かをまるで見みの遁してはおらぬのである。少くも或る気まずい感情を起させるような事を、誰たれかがお玉に話したのではあるまいかとまで、末造は推測たくましゆを逞うして見た。それでも誰が何を言つたかは、とうとう分からずにしま

った。

拾壹 じゅういち

翌朝お玉が、池の端の父親の家に来た時は、父親は丁度朝飯あきはんを食べてしまった所であった。化粧の手間を取らないお玉が、ちと早過ぎはせぬかと思いながら、急いで来たのだが、早起の老人はもう門口かどぐちを綺麗に掃いて、打水をして、それから手足を洗って、新しい畳の上が上がって、いつもの寂しい食事を済ませた所であった。

二三軒隔てては、近頃待合も出来ていて、夕方になれば騒がしい時があるが、両隣は同じように格子戸の締まった家で、殊に朝のうちは、あたりがひっそりしている。肱掛窓ひしかけまどから外を見れば、高野槇の枝の間から、爽さわやかな朝風に、微かに揺れている柳の糸と、その向うの池一面に茂っている蓮はすの葉とが見える。そしてその緑の中に、所所に薄い紅べにを点じたように、今朝開いた花も見えている。北向の家で寒くはあるまいかと云う話はあつたが、夏は求めても住みたい所である。

お玉は物を弁わきまえるようになってから、若し身に為合せしあわせが向いて来たなら、お父つさんをあ

あもして上げたい、こうもして上げたいと、色々に思つても見たが、今日の前に見るように、こんな家にこうして住まわせて上げれば、平生の願ねがが愜かなつたのだと云つても好いと、嬉しく思わずにはいられなかつた。しかしその嬉しさには一滴の苦い物が交つている。それがなくて、けさお父つさんに逢うのだったら、どんなにか嬉しかろうと、つくづく世の中の儘ままならぬを、じれつたくも思うのである。

箸を置いて、湯呑みに注いだ茶を飲んでいた爺いさんは、まだついぞ人のおとずれたことのない門かどの戸あの開いた時、はつと思つて、湯呑を下に置いて、上り口の方を見た。二枚折の葭よし簀すびび風ふうにまだ姿の遮られているうちに、「お父つさん」と呼んだお玉の声が聞えた時は、すぐに起たつて出迎えたいような気がしたのを、じつところえて据わつていた。そしてなんと云つて遣ろうかと、心の内にせわしい思案をした。「好くお父つさんの事を忘れずにいたなあ」とでも云おうかと思つたが、そこへ急いで這はい入つて来て、懐かしげに傍そばに来た娘を見ては、どうもそんな詞ことばは口に出されなくなつて、自分で自分を不満足に思いながら、黙つて娘の顔を見ていた。

まあ、なんと云う美しい子だろう。不断から自慢に思つて、貧しい中にも荒い事をさせずに、身綺麗にさせて置いた積ではあつたが、十日ばかり見ずにいるうちに、まるで生れ

替つて来たようである。どんな忙しい暮らしをしても、本能のように、肌に垢の附くような事はしていなかった娘ではあるが、意識して体を磨くようになってくるきのうきように比べて見れば、爺いさんの記憶にあるお玉の姿は、まだ璞のままであった。親が子を見て、老人が若いものを見て、美しいものは美しい。そして美しいものが人の心を和げる威力の下には、親だつて、老人だつて屈せずにはいられない。

わざと黙っている爺いさんは、渋い顔をしている積であつたが、不本意ながら、つい気色を和げてしまった。お玉も新しい境遇に身を委ねたために、これまで小さい時から一日も別れていたことのない父親を、逢いたい逢いたいと思ひながら、十日も見ずにいたのだから、話そうと思つて来た事も、暫くは口に出すことが出来ずに、嬉しげに父親の顔を見ていた。

「もうお膳を下げまして宜しゅうございませうか」と、女中が勝手から顔を出して、尻上がりの早言に云つた。馴染のないお玉には、なんと云つたか聞き取れない。髪を櫛巻にした小さい頭の下に太つた顔の附いているのが、いかにも不釣合である。そしてその顔が不遠慮に、さも驚いたように、お玉を目守っている。

「早くお膳を下げて、お茶を入れ替えて来るのだ。あの棚にある青い分のお茶だ」爺いさ

んはこう云つて、膳を前へ衝き出した。女中は膳を持って勝手へ這入った。

「あら。好いお茶なんか戴かなくつても好いものだから」

「馬鹿言え。お茶受もあるのだ」爺いさんは起つて、押入からブリキの罐を出して、菓子鉢へ玉子煎餅を盛っている。「これは宝丹のじき裏の内で拵えているのだ。この辺は便

利の好い所で、その側の横町には如燕の佃煮もある」

「まあ。あの柳原の寄席へ、お父つさんと聞きに行った時、何か御馳走のお話をして、その旨きこと、己の店の佃煮の如しと云つて、みんなを笑わせましたっけね。本当に福福しいお爺いさんね。高座へ出ると、行きなりお尻をくるつとまくつて据わるのですもの。わたくし可笑しくつて。お父つさんもあんなにお太りなさるようだと好いわ」

「如燕のように太つてたまるものか」と云いながら、爺いさんは煎餅を娘の前へ出した。

そのうち茶が来たので、親子はきのうもおとついても一しよにいたもののように、取留のない話をしていた。爺いさんがふと何か言にくい事を言うように、こう云った。

「どうだい、工合は。檀那は折々お出になるかい」

「ええ」とお玉は云つたぎり、ちよいと返事にまごついた。末造の来るのは折々どころではない。每晚顔を出さないことはない。これがよめに往つたので、折合が好いかと問われ

たのなら、大層好いから安心して下さいと、晴れ晴れと返事が出来るのだろう。それがこうした身の上で見れば、どうも檀那が毎晩お出になるとは、気が咎めて言いにくい。お玉は暫く考えて、「まあ、好い工合のようですから、お父っさん、お案じなさらなくつても好ござんすわ」と云つた。

「そんなら好いが」と爺いさんは云つたが、娘の答にどこやら物足らぬ所のあるのを感じた。問う人も、答える人も無意識に含糊の態をなして物を言うようになったのである。これまで何事も打ち明け合つて、お互の間に秘密と云うものを持つていたことのない二人が、厭でも秘密のあるらしい、他人行儀の挨拶をしなくてはならなくなつたのである。前に悪い婿を取つて騙された時なんぞは、近所の人に面目ないとは思つても、親子共胸の底には曲彼に在りと云う心持があつたので、互に話をし合うには、少しも遠慮はしなかつた。その時とは違つて、親子は一旦決心して纏めた話が旨く纏まつて、不自由のない身の上になつていながら、今は親しい会話の上に、暗い影のさす、悲しい味を知つたのである。暫くして爺いさんは、何か娘の口から具体的な返事が聞きたいような気がしたので、「一体どんな方だい」と、又新しい方角から問うて見た。

「そうね」と云つて、お玉は首を傾げていたが、独語のような調子で言い足した。

「どうも悪い人だとは思われませんか。まだ日も立たないのだけれども、荒い詞なんぞは掛けないのですもの」

「ふん」と云つて、爺いさんは得心の行かぬような顔をした。「悪い人の筈はないじやないか」

お玉は父親と顔を見合せて、急に動悸どうきのするのを覚えた。きょう話そうと思つて来た事を、話せば今が好いい折だとは思いながら、切角暮らしを樂たにして、安心をさせようとしてゐる父親に、新しい苦痛を感じさせるのがつらいからである。そう思つたので、お玉は父親との隔たりの大きくなるような不快を忍んで、日影ひかげものと云う秘密の奥に、今一つある秘密を、ここまで持つて来たまま蓋ふたを開けずに、そっくり持つて帰ろうと、際どい所で決心して、話を余所に逸そらしてしまつた。

「だつて随分いろいろな事をして、一代のうちに身しんしやう上じやうを拵しえた人だと云うのですから、わたくしどんな気立の人だか分からないと思つて、心配していたのですわ。そうですね。なんと云つたら好いいでしょう。まあ、おとこ氣のある人と云う風でございますの。真底からそんな人なのだから、それはなかなか分からないのですけれど、人にそう見せようと心掛けて何か言つたりしたりしている人のようね。ねえ、お父っさん。心掛ばかりだつてそん

なのは好いじやございませんか」こう云つて、父親の顔を見上げた。女はどんな正直な女でも、その時心に持つてゐる事を隠して、外の事を言うのを、男程苦にしはしない。そしてそう云う場合に詞数の多くなるのは、女としては余程正直なのだと云つても好いかも知れない。

「さあ。それはそんな物かも知れないな。だが、なんだかお前、檀那を信用してないよな、物の言いようをするじやないか」

お玉はにつこりした。「わたくしこれで段々えらくなつてよ。これからは人に馬鹿にせられてばかりはいない積ごうぎなの。豪氣ごうぎでしょう」

父親はおとなしい一方の娘が、めずらしく鋒ほこぎを自分に向けたように感じて、不安らしい顔をして娘を見た。「うん。己おれは随分人に馬鹿にせられ通しに馬鹿にせられて、世の中を渡つたものだ。だがな、人を騙すよりは、人に騙されている方が、気が安い。なんの商売をしても、人に不義理をしないように、恩になつた人を大事にするようにしていなくてはならないぜ」

「大丈夫よ。お父さんがいつも、たあ坊は正直だからとそう云つたでしょう。わたくし全く正直なの。ですけれど、この頃つくづくそう思つてよ。もう人に騙されることだけは、

御免を蒙こうむりたいわ。わたくし嘘を衝いたり、人を騙したりなんかしない代かわりには、人に騙されもしない積なの」

「そこで檀那の言うことも、うかとは信用しないと云うのかい」

「そうなの。あの方はわたくしをまるで赤ん坊のように思っていますの。それはあんな目から鼻へ抜けるような人ですから、そう思うのも無理はないのですけれど、わたくしこれでもあの人の思う程赤ん坊ではない積なの」

「では何かい。何かこれまで檀那の仰おつしやった事に、本当でなかった事でもあつたのを、お前が気が附いたとでも云うのかい」

「それはあつてよ。あの婆あさんが度々そう云つたでしょう。あの人は奥さんが子供を置いて亡くなったのだから、あの人の世話になるのは、本妻ではなくても、本妻も同じ事だ。只世間体があるから、裏うら店だなにいたものを内に入れることは出来ないのだと云つたのね。ところが奥さんがちやあんとあるの。自分で平気でそう云うのですもの。わたくしびつくりしてよ」

爺いさんは目を大きくした。「そうかい。矢やつ張媒人口ばりなこうどぐちだなあ」

「ですから、わたくしの事を奥さんには極ごくの内証ないしやうにしているのですよ。奥さんに嘘を衝

く位ですから、わたくしにだって本当ばかり云つていやしませんわ。わたくし眉毛に唾つばを付けていなくちゃあ」

爺いさんは飲んでしまった烟草の吸殻をはたくのも忘れて、なんだか急にえらくなつたような娘の様子をぼんやりと眺めていると、娘は急に思い出した様に云つた。「わたくしきようはもう帰つてよ。こうして一度来て見れば、もうなんでもなくなつたから、これからはお父つさんとこへ毎日のように見に来て上げるわ。実はあの人が往いけと云わないうちに来ては悪いかと思つて、遠慮していたの。とうとうゆうべそう云つてことわつて置いて、けさ来たのだけわ。わたくしの所へ来た女中は、それは子供で、お午ひるの支度だつて、わたくしが帰つて手伝つて遣らなくては出来ないの」

「檀那にことわつて来たのなら、午もこつちで食べて行けば好いい」

「いいえ。不用心ですわ。またすぐ出掛けて来てよ。お父つさん。さようなら」

お玉が立ち上がるとたんに、女中が慌てて履物を直しに出た。気が利かぬようでも、女は女に遭遇して観察をせずには置かない。道で行き合つても、女は自己の競争者として外の女を見ると、或る哲学者は云つた。汁椀の中へ親指を衝つ込む山出しの女でも、美しいお玉を気にして、立聴たちぎきをしていたものと見える。

「じゃあ又来るが好い。檀那に宜しく言ってくれ」爺いさんは据わったままこう云った。

お玉は小さい紙入を黒襦子くろしゆすの帯の間から出して、幾らか紙ひねに擦ひつて女中に遣つて置いて、駒下駄を引つ掛けて、格子戸の外へ出た。

たよりに思う父親に、苦しい胸を訴えて、一しよに不幸を歎く積で這入った門を、我ながら不思議な程、元氣好くお玉は出た。切角安心している父親に、余計な苦勞を掛けたくない、それよりは自分を強く、丈夫に見せて遣りたいと、努力して話をしていっているうちに、これまで自分の胸うちの中に眠つていた或る物が醒せい覚かくしたような、これまで人にたよつていた自分が、思い掛けず独立したような氣になつて、お玉は不忍の池ほどりの畔を、晴やかな顔をして歩いている。

もう上野の山をだいぶはずれた日がくわつと照つて、中島の弁天やしろうの社を真まつ赤に染めていゝのに、お玉は持つて来た、小さい蝙蝠こうもりをも挿ささずに歩いているのである。

拾じゆう貳に

或る晩末造が無縁坂から帰つて見ると、お上さんがもう子供を寝かして、自分だけ起き

ていた。いつも子供が寝ると、自分も一しよに横になっているのが、その晩は据わつて俯うつむ向加減つむぎになつていて、末造が蚊屋かやの中に這入つて来たのを知つていながら、振り向いても見ない。

末造の床は一番奥の壁際に、少し離して取つてある。その枕元には座布団が敷いて、烟草盆と茶道具とが置いてある。末造は座布団の上に据わつて、烟草を吸い附けながら、優しい声で云つた。

「どうしたのだ。まだ寐ねないでいるね」

お上さんは黙っている。

末造も再び譲歩しようとはしない。こつちから媮こつわ和を持ち出したに、彼が応ぜぬなら、それまでの事だと思つて、わざと平気で烟草を呑のんでいる。

「あなた今までどこにいたんです」お上さんは突然頭を持ち上げて、末造を見た。奉公人を置くようになつてから、次第に詞を上品にしたのだが、差向いになると、ぞんざいになる。ようよう「あなた」だけが維持せられている。

末造は鋭い目で一目女房を見たが、なんとも云わない。何等なにかかの知識を女房が得たらしめるとは認めても、その知識の範囲を測り知ることが出来ぬので、なんとも云うことが出来

ない。末造は妄りに語つて、相手に材料を供給するような男ではない。

「もう何もかも分かっています」鋭い声である。そして末の方は泣声になり掛かっている。「変な事を言うなあ。何が分かつたのだい」さも意外な事に遭遇したと云うような調子で、声はいたわるように優しい。

「ひどいじゃありませんか。好くそんなにしらばつくれていられる事ね」夫の落ち着いているのが、却つて強い刺戟のように利くので、上さんは声が切れ切れになつて、湧いて来る涙を襦袢の袖でふいている。

「困るなあ。まあ、なんだかそう云つて見ねえ。まるつきり見当が附かない」

「あら。そんな事を。今夜どこにいたのだから、わたしにそう云つて下さいと云つて置いている。あなた好くそんな真似が出来た事ね。わたしには商用があるのなのと云つて置いて、困物なんぞを拵えて」鼻の低い赤ら顔が、涙で煤でたようになったのに、こわれた丸鬚の鬢の毛が一握へばり附いている。潤んだ細い目を、無理に大きく睜つて、末造の顔を見ていたが、ずっと傍へいざり寄つて、金天狗の燃えさしを撮んでいた末造の手に、力一ぱいしがみ附いた。

「廃せ」と云つて、末造はその手を振り放して、畳の上に散つた烟草の燃えさしを揉み消

した。

お上さんはしゃくり上げながら、又末造の手にしがみ附いた。「どこにだって、あなたのような人があるでしょうか。いくらお金が出来たって、自分ばかり檀那顔だんながおをして、女房には着物一つ拵えてはくれずに、子供の世話をさせて置いて、好い気になって妾狂めかけぐるいをするなんて」

「廃せと云えば」末造は再び女房の手を振り放した。「子供が目を覚すじやないか。それに女中部屋にも聞える」翳かすめた声に力を入れて云ったのである。

末の子が寝返りをして、何か夢中で言ったので、お上さんも覚えぬ声を低うして、「一体わたしどうすれば好いのでしょうか」と云って、今度は末造の胸の所に顔を押し付けて、しくしく泣いている。

「どうするにも及ばないのだ。お前が人が好いもんだから、人に焚たき附けられたのだ。妾だの、困物だのって、誰たれがそんな事を言ったのだい」こう云いながら、末造はこわれた丸鬚のぶるぶる震えているのを見て、醜い女はなぜ似合わない丸鬚を結いたがるものだろうと、気楽な問題を考えた。そして丸鬚の震動が次第に細かく刻むようになると同時に、どの子供にも十分の食料を供給した、大きい乳房が、懐炉を抱いたように水落みずおちの辺あたりに押し

附けられるのを末造は感じながら、「誰が言ったのだ」と繰り返した。

「誰だつて好いじやありませんか。本当なんだから」乳房の圧はいよいよ加わつて来る。

「本当でないから、誰でも好くはないのだ。誰だかそう云え」

「それは言つたつてかまいませんとも。魚金のお上さんなの」

「なにまるで狸たぬきが物を言うようで、分かりやあしない。むにやむにやのむにやむにやさんなのとはなんだい」

お上さんは顔を末造の胸から離して、悔やしそうに笑つた。「魚金のお上さんと、そう云つているじやありませんか」

「うん。あいつか。おお方そんな事だろうと思つた」末造は優しい目をして、女房の逆上したような顔を見ながら、徐しずかに金天狗に火を附けた。「新聞屋なんかが好く社会の制裁だのなんのと云うが、己はその社会の制裁と云う奴を見た事がねえ。どうかしたら、あの金棒引なんか、その制裁と云う奴かも知れねえ。近所中のおせつかいをしやがる。あんな奴の言う事を真まに受けてたまるものか。己が今本当の事を云つて聞いて遣やるから、好く聞いていろ」

お上さんの頭は霧が掛かつたように、ぼうつとしているが、もしや騙だまされるのではある

まいかと云う猜疑さいぎだけは醒さめている。それでも熱心に末造の顔を見て謹聴している。会社の制裁と云うことを言われた時もそうであるが、いつでも末造が新聞で読んだ、むずかしい詞を使つて何か言うと、お上さんは氣おくれがして、分からぬなりに屈服してしまうのである。

末造は折々烟草を呑んで烟けぶりを吹きながら、矢張やはり女房の顔を暗示するようにじつと見て、こんな事を言っている。「それ、お前も知つているだろう。まだ大学があつちにあつた頃、好く内に来た吉田さんと云うのがいたなあ。あの金縁きんぶちめがね目金を掛けて、べらべらした着物を着ていた人よ。あれが千葉の病院へ行つてゐるが、まだ己の方の勘定が二年や三年じゃあ埒らちが明かねえんだ。あの吉田さんが寄宿舎にいた時から出来ていた女で、こないだまで七曲ななまがりの店たなを借りて入れてあつたのだ。最初は月々極きまって為送りしおくをしていたところが、今年になつてから手紙もよこさなけりや、金もよこさねえ。そこで女が先方へ掛け合つてくれろと云つて己に頼んだのだ。どうして己を知つてゐるかと思ふだろうが、吉田さんは度々己の内へ来ると人の目に附いて困るからと云つて、己を七曲の内へ呼んで書換の話なんぞをした事がある。その時から女が己を知つていたのだ。己も随分迷惑な話だが、序ついでだから掛け合つて遣つたよ。ところがなかなか埒は明かねえ。女はしつっこく頼む。己は飛

んだ奴に引つ掛かっと思つて持て扱つているのだ。お負まけに小綺麗こぎれいな所で店賃の安い所へ越したいから、世話をしてくれろと云うので、切通しの質屋の隠居のいた跡へ、面倒を見て越させて遣つた。それやこれやで、こないだからちよいちよい寄つて、烟草を二三服呑んだ事があるもんだから、近所の奴がかれこれ言やあがるのだろう。隣は女の子を集めて、為立物の師匠をしていると云うのだから、口はうるさいやな。あんな所に女を囲つて置く馬鹿があるものか」こんな事を言つて、末造はさげすんだように笑つた。

お上さんは小さい目をかがや赫かして、熱心に聞いていたが、この時甘えたような調子で云つた。「それはお前さんの云う通りかも知れないけれど、そんな女の所へ度々行くうちには、どうなるか知れたものじゃありやしない。どうせお金で自由になるような女だもの」お上さんはいつか「あなた」を忘れている。

「馬鹿言え。己がお前と云うものがあるのに、外ほかの女に手を出すような人間かい。これまでだつて、女をどうしたと云うことが、只の一度でもあつたかい。もうお互やきもちげんかに焼餅喧嘩やきもちげんかをする年でもあるめえ。好い加減にしろ」末造は存外容易に弁解べんげが功を奏したと思つて、心中こころに凱歌がいかを歌つている。

「だつてお前さんのようにしている人を、女は好くものだから、わたしやあ心配さ」

「へん。あが仏尊しと云う奴だ」

「どう云うわけなの」

「己のような男を好いてくれるのは、お前ばかりだと云うことよ。なんだ。もう一時を過ぎてゐる。寝よう寝よう」

拾参 じゆうさん

眞実と作為とをないませ交まじにした末造の言分けが、一時お上さんの嫉妬しつとの火を消したようでも、その効果は勿論もちろん palliatif 《パリアチーフ》なのだから、無縁坂上に実在している物が、依然実在している限かぎりは、蔭かげぐち口くちやら壁訴訟かべしゆんやらの絶えることはない。それが女中の口から、「今日も何なにがし某たがひが檀那様の格子戸にお這入になるのを見たそうでございます」と云うような詞になつて、お上さんの耳に届く。しかし末造は言分けには窮きりせない。商用とやらが、そう極まつて晩方にあるものではあるまいと云えば、「金を借かりる相談を朝つぱらからする奴があるものか」と云う。なぜこれまでは今のようでなかつたかと云えば、「それは商売を手広に遣り出さない前の事だ」と云う。末造は池の端へ越すまでは、何もかも一

人でしていたのに、今は住まいの近所に事務所めいたものが置いてある外に、竜泉寺町にまで出張所とでも云うような家があつて、学生が所謂金策のために、遠道を踏まなくても済むようにしてある。根津で金のいるものは事務所に通じ附ける。吉原でいるものは出張所に通じ附ける。後には吉原の西の宮と云う引手茶屋と、末造の出張所とは氣脈を通じていて、出張所で承知していれば、金がなくても遊ばれるようになっていた。宛然たる遊蕩の兵站が編成せられていたのである。

末造夫婦は新に不調和の階級を進める程の衝突をせずに、一月ばかりも暮っていた。つまりその間は末造の詭弁が功を奏していたのである。然るに或る日意外な辺から破綻が生じた。

さいわい夫が内にいるので、朝の涼しいうちに買物をして来ると云つて、お常は女中を連れて広小路まで行つた。その帰りに仲町を通り掛かると、背後から女中が袂をそつと引く。「なんだい」と叱るように云つて、女中の顔を見る。女中は黙つて左側の店に立っている女を指さす。お常はしづしづその方を見て、覚えず足を駐める。そのとたんに女は振り返る。お常とその女とは顔を見合せたのである。

お常は最初芸者かと思つた。若し芸者なら、数寄屋町にこの女程どこもかしこも揃つて

美しいのは、外にあるまいと、せわしい暇に判断した。しかし次の瞬間には、この女が芸者の持つている何物かを持つていないのに気が附いた。その何物かはお常には名状するとは出来ない。それを説明しようとするれば、態度の誇張とでも云おうか。芸者は着物（い）を好い恰好に着る。その好い恰好は必ず幾分か誇張せられる。誇張せられるから、おとなしいと云う所が失われる。お常の目に何物かが無いと感ぜられたのは、この誇張である。

店の前の女は、傍を通り過ぎる誰やらが足を駐めたのを、殆ど意識せずに感じて、振り返つて見たが、その通り過ぎる人の上に、なんの注意すべき点をも見出さなかつたので、蝙蝠傘を少し内廻転をさせた膝（ひざ）の間に寄せ掛けて、帯の間から出して持つていた、小さい蝦蟇（がまぐち）口の中を、項（うなじ）を屈（かが）めて覗（のぞ）き込んだ。小さい銀貨を捜しているのである。

店は仲町の南側の「たしがらや」であつた。「たしがらや倒（さか）さに読めばやらかした」と、何者かの言い出した、珍らしい屋号のこの店には、金字を印刷した、赤い紙袋に入れた、齒磨（は）を売つていた。まだ鍊齒磨（は）なんぞの舶来していなかつたその頃、上等のざら附かない製品は、牡丹（ぼたん）の香（におい）のする、岸田の花王散と、このたしがらやの齒磨（は）とであつた。店の前の女は別人でない。朝早く父親の所を訪ねた帰りに、齒磨（は）を買いに寄つたお玉であつた。

お常（おとこ）が四五歩通り過ぎた時、女中（むすめ）が咄（はな）いた。「奥（おく）さん。あれですよ。無縁坂（むえんざか）の女は」

黙つて頷いたお常には、この詞が格別の効果を与えないので、女中は意外に思った。あの女は芸者ではないと思うと同時に、お常は本能的に無縁坂の女だと云うことを曉つていたのである。それには女中が只美しい女がいると云うだけで、袖を引いて教えはしない筈だと云う判断も手伝つているが、今一つ意外な事が影響している。それはお玉が膝の所に寄せ掛けていた蝙蝠傘である。

もう一月余り前の事であつた。夫が或る日横浜から帰つて、みやげに蝙蝠の日傘を買つて来た。柄がひどく長くて、張つてある切れが割合に小さい。背の高い西洋の女が手に持つておもちやにするには好かろうが、ずんぐりむっくりしたお常が持つて見ると、極端に言えば、物干竿ものほしざおの尖さきへおむつを引つ掛けて持つたようである。それでそのまま差さずにして置いた。その傘は白地に細かい弁慶べんけい縞じまのような形かたが、藍あゐで染め出してあつた。たしがらやの店にいた女の蝙蝠傘がそれと同じだと云うことを、お常ははつきり認めた。酒屋の角を池の方へ曲がる時、女中が機嫌を取るように云つた。

「ねえ、奥さん。そんなに好い女じゃありませんでしょう。顔が平べったくて、いやに背が高くして」

「そんな事を言うものじゃないよ」と云つたぎり、相手にならずにずんずん歩く。女中は

当がはずれて、不平らしい顔をして附いて行く。

お常は只胸の中うちが湧わき返るようで、何事をもはつきり考えることが出来ない。夫に對してどうしよう、なんと云おうと云う思案も無い。その癖早く夫に打ぶつ附かつて、なんとか云わなくてはいらぬような気がする。そしてこんな事を思う。あの蝙蝠傘を買つて来て貰つた時、わたしはどんなにか喜んだだろう。これまでこつちから頼まぬのに、物なんぞ買つて来てくれたことはない。どうして今度に限つて、みやげを買つて来てくれたのだろうと、不思議には思ったが、その不思議と云うのも、どうして夫が急に親切になつたかと思つたのであつた。今考えれば、お方あの女が頼んで買つて貰つた時、ついでにわたしのを買つたのだろう。きつとそうに違いない。そうとは知らずに、わたしは難ありがた有く思つたのだ。わたしには差されもしない、あんな傘を貰つて、難有く思つたのだ。傘ばかりでは無い。あの女の着物や髪のものも、内で買つて遣つたのかも知れない。丁度わたしの差している、毛繻子張のこの傘と、あの舶来の蝙蝠とが違つたように、わたしとあの女とは、身に着けている程の物が皆違つている。それにわたしばかりではない。子供に着物を着せたと思つても、なかなか拵こしらえてくれはしない。男の子には筒ぼが一枚あれば好いものだと云う。女の子だと、小さいうちに着物を拵えるのは損だと云う。何万と云う金を持った

人の女房や子供に、わたし達親子のようなりをしているものがあるだろうか。今から思つて見れば、あの女がいたお蔭で、わたし達に構つてくれなかつたかも知れない。吉田さんの持物だつたなんと云うのも、本当だかどうだか当にはならない。七曲りとかにいた時分から、内で囲つて置いたかも知れない。いや。きっとそうに違ない。金廻りが好くなつて、自分の着物や持物に贅ぜいたく沢たくをするようになったのを、附合があるからだのなんのと云つたが、あの女がいたからだろう。わたしをどこへでも連れて行かずに、あの女を連れて行つたに違ない。ええ、悔やしい。こんな事を思つていると、突然女中が叫んだ。

「あら、奥さん。どこへいらつしやるのです」

お常はびつくりして立ち留まつた。下を向いてずんずん歩いていて、我家の門かどを通り過ぎようとしたのである。

女中が無遠慮に笑つた。

拾肆じゅうし

朝の食事の跡始末をして置いて、お常が買物に出掛ける時、末造は烟草を吞みつつ新聞

を読んでいたが、帰って見れば、もう留守になっていた。若し内にいたら、なんと云つて
 好いかは知らぬが、とにかく打つ附かつて、むしゃぶり附いて、なんとも云つて遣りた
 いような心持で帰つたお常は拍子抜けがした。午ひるしよく食の支度もしなくてはならない。も
 う間もなく入用いりようになる子供の袷あわせの縫い掛けてあるのも縫わなくてはならない。お常は器
 械的に、いつものように働いているうちに、夫に打つ附かろうと思つた鋭鋒えいほうは次第くじに挫
 けて来た。これまでもひどい勢いきおいで、石垣に頭を打ち附ける積りで、夫に衝突したことは、
 度々ある。しかしいつも頭にあらがう筈の石垣が、腕を避ける暖簾のれんであるのに驚かされる。
 そして夫が滑かな舌で、道理らしい事を言うのを聞いてみると、いつかその道理に服する
 のではなくて、只何がなしに萎なやされてしまうのである。きようはなんだか、その第一の
 襲撃も旨うまく出来そうには思われなくなつて来る。お常は子供を相手に午食を食べる。喧嘩
 をする子供の裁判をする。袷あわせを縫う。又夕食の支度をする。子供に行水を遣わせて、自分
 も使う。蚊遣かやりをしながら夕食を食べる。食後に遊びに出た子供が遊あそび草くたび臥たれて帰る。女中
 が勝手から出て来て、極まつた所に床を取つたり、蚊帳かやを吊つつたりする。手水ちようずをさせて
 子供を寝かす。夫の夕食の膳はえよけに蠅除はえよけを被かぶせて、火鉢に鉄瓶を掛けて、次の間まに置く。夫
 が夕食に帰らなかつた時は、いつでもこうして置くのである。

お常はこれだけの事を器械的にしてしまった。そして団扇うちわを一本持つて蚊屋かやの中へ這入はいって据わった。その時けさ途みちで逢った、あの女の所に、今時分夫が往つてゐるだろうと云うことが、今更のようにはつきりと想像せられた。どうも体を落ち着けて、据わつてはいられぬような気持がする。どうしよう、どうしようと思ううちに、ふらふらと無縁坂うちの家の所まで往つて見たくなる。いつか藤ふじ村むらへ、子供の一番好きな田いな舎かま饅まんじゅう頭うを買いに往つた時、したて物の師匠の内の隣と云うのはこの家だなど思つて、見て通つたので、それらしい格子戸の家は分かっている。ついあそこまで往つて見たい。火影ほかげが外へ差しているか。話声かすが微かにでも聞えているか。それだけでも見て来たい。いやいや、そんな事は出来ない。外へ出るには女中部屋の傍の廊下を通らぬわけには行かない。この頃はあの廊下の所の障子がはずしてある。松はまだ起きて縫物をしてゐる筈である。今時分どこへ往くのだと聞かれた時、なんとも返事のしようがない。何か買に出ると云つたら、松が自分で行こうと云うだろう。して見れば、どんなに往つて見たくても、そつと往つて見ることは出来ない。ええ、どうしたら好かるう。けさ内へ帰る時は、ちつとも早くあの人に逢いたいと思つたが、あの時逢つたら、わたしはなんと云つただらう。逢つたら、わたしの事だから、取留のない事ばかり言つたに違いない。そうしたらあの人の方が又好い加減の事を言

って、わたしを騙してしまっただろう。あんな利口な人だから、どうせ喧嘩をしては慍かなわない。いっそ黙つていようか。しかし黙つていてどうなるだろうか。あんな女が附ついていては、わたしなんぞはどうなつても構わぬ氣になつているだろう。どうしよう。どうしよう。

こんな事を繰り返し繰り返し思つては、何遍か思想が初の発ほつそくてん足あともどり点りに跡あと戻もどりをする。そのうちに頭がぼんやりして来て、何がなんだか分からなくなる。しかしとにかく烈はげしく夫に打つ附つかつたつて駄目だから、よそうと云うことだけは極めることが出来た。

そこへ末造が這入つて来た。お常はわざとらしく取り上げた団扇の柄をいじつて黙つてゐる。

「おや。又変な様子をしているな。どうしたのだい」上さんがいつもする「お帰りなさい」と云う挨拶をしないでいても、別に腹は立てない。機嫌きげんが好いいからである。

お常は黙つている。衝突を避けようとは思つたが、夫の歸つたのを見ると、悔やしさが込み上げて来て、まるで反抗せずにはいられそうになくなった。

「又何なか下くだだららない事を考えているな。よせよせ」上さんの肩の所に手を掛けて、二三遍ゆさぶつて置いて、自分の床に据わつた。

「わたしどうしようかと思つていますの。帰ろうと云つたつて、帰る内は無し、子供もあるし」

「なんだと。どうしようかと思つている。どうもしなくたって好いじゃないか。天下は太平無事だ」

「それはあなたは太平樂を言つていられますでしょう。わたしさえどうにかなつてしまえば好い^いのだから」

「おかしいなあ。どうにかなるなんて。どうなるにも及ばない。そのままでは好い^い「たんと茶にしてお出^{いで}なさい。いてもいなくつても好い人間だから、相手にはならないでしょう。そうね。いてもいなくつてもじやない。いない方が好いに極ま^まつているのだつけ」

「いやにひねくれた物の言いようをするなあ。いない方が好いのだつて。大違だ。いなくては困る。子供の面倒を見て貰うばかりでも、大役だからな」

「それは跡へ綺麗なおつ母さんが来て、面倒を見てくれますでしょう。継子^{ままご}になるのだけど」

「分からねえ。二親揃つて附いているから、継子なんぞにはならない筈だ」

「そう。きつとそうなの。まあ、好い気な物ね。ではいつまでも今のようになっている積な

のね」

「知れた事よ」

「そう。別品とおたふくとに、お揃の蝙蝠を差させて」

「おや。なんだい、それは。お茶番の趣向見たいな事を言っているじゃないか」

「ええ。どうせわたしなんぞは真面目な狂言には出られませんからね」

「狂言より話が少し真面目にして貰いたいなあ。一体その蝙蝠てえのはなんだい」

「分かっているでしょう」

「分かるものか。まるつきり見当が附かねえ」

「そんなら言いましょう。あの、いつか横浜から蝙蝠を買って来たでしょう」

「それがどうした」

「あれはわたしばかりに買って下すつたのじゃなかったのね」

「お前ばかりでなくて、誰に買って遣るものかい」

「いいえ。そうじゃないでしょう。あれは無縁坂の女のを買った序に、ふいと思いついて、わたしのをも買って来たのでしょう」さつきから蝙蝠の話はしていても、こう具体的に云うと同時に、お常は悔やしさが込み上げて来るように感ずるのである。

「お手の筋」だとも云いたい程適中したので、末造はぎくりとしたが、反対に呆れたよあきうな顔をして見せた。「べらぼうな話だなあ。何かい。その、お前に買った傘と同じ傘を、吉田さんの女が持っているとも云うわけかい」

「それは同じのを買って遣ったのだから、同じのを持っているに極まっています」声が際立って鋭くなっている。

「なんの事だ。呆れたものだけ。好い加減にしろい。なる程お前に横浜で買って遣った時は、サンプルで来たのだと云うことだったが、もう今頃は銀座辺でさらに売っているに違ない。芝居なんぞに好くある奴で、これがほんとの無実の罪と云うのだ。そして何かい。

お前、あの吉田さんの女に、どこかで逢ったとも云うのかい。好く分かったなあ」

「それは分かりますとも。ここいらで知らないものはないのです。別品だから」にくにくしい声である。これまでは末造がしらばっくれると、ついそうかと思つてしまつたが、今度は余り強烈な直覚をして、その出来事を目前に見たように感じているので、末造の詞ことばは、なる程そうでもあるかとは、どうしても思われなかつた。

末造はどうして逢つたか、話でもしたのかと、種いろいろ々に考えていながら、この場合に根掘り葉掘り問うのは不利だと思つて、わざと追窮しない。「別品だつて。あんなのが別品

と云うのかなあ。妙に顔の平べったいような女だが」

お常は黙っていた。しかし憎い女の顔に難癖を附けた夫の詞に幾分か感情を融和させられた。

この晩にも物を言い合つて興奮した跡の夫婦の中直りがあつた。しかしお常の心には、刺されたとげの抜けないような痛みが残っていた。

拾伍じゅうご

末造の家の空気は次第に沈んだ、重くろしい方へ傾いて来た。お常は折々只ぼうつとして空を見ていて、何事も手に附かぬことがある。そんな時には子供の世話も何も出来なくなつて、子供が何か欲しいと云えば、すぐにあらあらしく叱る。叱つて置いて気が附いて、子供にあやまつたり、独りで泣いたりする。女中が飯の菜を何にしようかと問うても、返事をしなかつたり、「お前の好いようにおし」と云つたりする。末造の子供は学校では、高利貸の子だと云つて、友達に擯ひんせき斥せきせられても、末造が綺麗好で、女房に世話をさせるので、目立つて清潔になつていたのが、今は五味ごみだらけの頭をして、綻ほころびたままの着物を

着て往来で遊んでいることがあるようになった。下女はお上さんがあんなでは困ると、口小言を言いながら、下手の乗っている馬がなまけて道草を食うように、物事を投遣なげやりにして、鼠入らずの中で着さかなが腐つたり、野菜が干物になったりする。

家の中の事を生帳きぢょうめん面にしたがる末造には、こんな不始末を見ているのが苦痛でならない。しかしこうなった元は分かつていて、自分が悪いのだと思うので、小言を言うわけにも行かない。それに末造は平生小言を言う場合にも、笑談じょうだんのように手軽に言つて、相手に反省させるのを得意としているのに、その笑談らしい態度が却かえつて女房の機嫌を損ずるように見える。

末造は黙つて女房を観察し出した。そして意外な事を発見した。それはお常の変な素振が、亭主の内にいる特殊に甚しくて、留守になると、却つて醒せい覚かくしたようになって働いていることが多いと云う事である。子供や下女の話の話を聞いて、この関係を知つた時、末造は最初は驚いたが、伶俐れいりな頭で色々に考えて見た。これはする事の氣に食わぬ己おれの顔を見ている間、この頃の病氣を出すのだ。己は女房にどうかして夫が冷澹れいたんだと思わせまい、疎まれるように感ぜさせまいとしているのに、却つて己が内にいる時の方が不機嫌だとすると、丁度薬を飲ませて病氣を悪くするようなものである。こんなつまらぬ事はない。こ

れからは一つ反対にして見ようと末造は思った。

末造はいつもより早く内を出たり、いつもより遅く内へ帰ったりするようになった。しかしその結果は非常に悪かった。早く出た時は、女房が最初は只驚いて黙って見ていた。遅く帰った時は、最初の度にいつもの拗ねて見せる消極的手段と違って、もう我慢がし切れない、勘忍袋の緒が切れたと云う風で、「あなた今までどこにいましたの」と詰め寄つて来た。そして爆発的に泣き出した。その次の度からは早く出ようとすると、「あなた今からどこへ行くのです」と云つて、無理に留めようとする。行先を言えば嘘だと云う。構わずに出ようとすると、是非聞きたい事があるから、ちよいとでも好い、待つて貰いたいと云う。着物を掴まえて放さなかつたり、玄関に立ち塞がつたり、女中の見る目も厭わずに、出て行くのを妨げようとする。末造は気に食わぬ事をも笑談のようにして荒立てずに済ます流義なのに、むしやぶり附くのを振り放す、女房が倒れると云う不体裁を女中に見られた事もある。そんな時に末造がおとなしく留められて内において、さあ、用事を聞こうと云うと、「あなたわたしをどうしてくれる気なの」とか、「こうしていて、わたしの行末はどうなるでしょう」とか、なかなか一朝一夕に解決の出来ぬ難問題を提出する。要するに末造が女房の病気に試みた早出遅帰の対症療法は全く功を奏せなかつたのであ

る。

末造は又考えて見た。女房は己の内にいる時の方が機嫌が悪い。そこで内にいまいとすれば、強いて内にいさせようとする。そうして見れば、求めて己を内にいさせて、求めて自分の機嫌を悪くしているのである。それに就いて思い出した事がある。和泉橋時代に金を貸して遣った学生に猪飼いかいと云うのがいた。身なりに少しも構わないと云う風をして、素足に足駄はを穿いて、左の肩を二三寸高くして歩いてきた。そいつがどうしても金を返さず、書換もせずに逃げ廻っていたのに、或日青石横町あおいしよこちようの角で出くわした。「どこへ行くのです」と云うと、「じきその柔術の先生の所へ行くのだよ。例のはいずれそのうちと云って摩り抜けて行つた。己はそのまま別れて歩き出す真似をして、そつと跡へ戻つて、角に立つて見ていた。猪飼は伊予紋に這入つた。己はそれを突き留めて置いて、広小路で用を達して、暫く立つてから伊予紋へ押し掛けて行つた。猪飼奴めさすがに驚いたが、持前の豪傑気取で、芸者を二人呼んで馬鹿騒ぎをしている席へ、己を無理に引き摩り上げて、「野暮を言わずにきようは一杯飲んでくれ」と云つて、己に酒を飲ませやがった。あの時己は始て芸者と云うものを座敷で見たが、その中に凄すこいような意気な女がいた。おしゆんと云つたつけ。そいつが酔つ払つて猪飼の前に据わつて、何が癩しゃくに障つていたのだから、毒

づき始めた。その時の詞を、己は黙って聞いていたが、いまだに忘れない。「猪飼さん。あなたきつそうな風をしていても、まるでいく地のない方ね。あなたに言つて聞かせて置くのですが、女と云うものは時々ぶんなぐつてくれる男にでなくつては惚れません。好く覚えていらつしやい」と云つたつ。芸者には限らない。女と云うものはそうしたものがも知れない。この頃のお常奴は、己を傍に引き附けて置いてふくれ面をして抗つてばかりいようとしゃがる。己にどうかして貰いたいと云う様子が見えている。打たれたいのだ。そうだ。打たれたいのだ。それに相違ない。お常奴は己がこれまで食う物もろくに食わせないで、牛馬うしうまのように働かせていたものだから、獣のようになっていて、女らしい性質が出ずにいたのだ。それが今の家に引き越した頃から、女中を使って、奥さんと云われて、だいぶ人間らしい暮らしをして、少し世間並の女になり掛かつて来たのだ。そこでおしゆんの云つたようにぶんなぐつて貰いたくなつたのだ。

そこで己はどうだ。金の出来るまでは、人になんと云われても構わない。乳臭い青二才にも、旦那と云つてお辞儀をする。踏まれても蹴けられても、損けさえしなければ好いと云う気になって、世間を渡つて来た。毎日毎日どこへ往いつても、誰たれの前でも、平蜘蛛ひらぐものようになつて這いつくばつて通つた。世間の奴等に付き合つて見るに、目上に腰の低い奴は、目

下にはつらく当つて、弱いものいじめをする。酔つて女や子供をなぐる。己には目上も目下もない。己に金を儲けさせてくれるものの前には這いつくばう。そうでない奴は、誰でも彼でも一切いるもないも同じ事だ。てんで相手にならない。打ち遣つて置く。なぐるなんと云う余計な手数てすうは掛けない。そんな無駄をする程なら、己は利足の勘定りそくでもする。女房をもその扱いにしていたのだ。

お常奴己になぐつて貰いたくなつたのだ。当人には氣の毒だが、こればかりはお生憎あいにく様だ。債務者の脂を柚子ゆずなら苦い汁が出るまで絞ることは己に出来る。誰をも打つことは出来ない。末造はこんな事を考えたのである。

拾陸じゅうろく

無縁坂の人通りが繁くなつた。九月になつて、大学の課程が始まるので、国々へ歸つていた学生が、一時いちじに本郷界隈かいわいの下宿屋に戻つたのである。

朝晩はもう涼しくても、昼中はまだ暑い日がある。お玉の家では、越して来た時掛け替かえた青簾あおすだれの、色の褪める隙ひまのないのが、肱掛窓ひしかけまどの竹格子の内側を、上から下まで透す

間なく深く鎖している。無聊に苦んでいるお玉は、その窓の内で、暁斎や是真の画のある団扇を幾つも挿した団扇挿しの下の柱にもたれて、ぼんやり往来を眺めている。三時が過ぎると、学生が三四人ずつの群をなして通る。その度毎に、隣の裁縫の師匠の家で、小雀の囀るような娘達の声が一際喧しくなる。それに促されてお玉もどんな人が通るか、覚えず気を付けて見ることがある。

その頃の学生は、七八分通りは後に言う壮士肌で、稀に紳士風なのがあると、それは卒業直前の人達であった。色の白い、目鼻立の好い男は、とかく軽薄らしく、利いた風で、懐かしくない。そうでないのは、学問の出来る人がその中にあるのかは知れぬが、女の目には荒々しく見えて厭である。それでもお玉は毎日見るともなしに、窓の外を通る学生を見ている。そして或る日自分の胸に何物かが芽ぎして来ているらしく感じて、はつと驚いた。意識の闕の下で胎を結んで、形が出来てから、突然躍り出したような想像の塊に驚かされたのである。

お玉は父親を幸福にしようと言う目的以外に、何の目的も有していなかったもので、無理に堅い父親を口説き落すようにして人の妾になった。そしてそれを墮落せられるだけ墮落するのだけ見て、その利他的行為の中に一種の安心を求めていた。しかしその檀那と頼ん

だ人が、人もあろうに高利貸であつたと知つた時は、余りの事に途方に暮れた。そこでどうも自分一人で胸のうやもやを排し去ることが出来なくなつて、その心持を父親に打ち明けて、一しよに苦み悶えて貰おうと思つた。そうは思つたものの、池の端の父親を尋ねてその平穩な生活を目のあたり見ては、どうも老人の手にしている杯の裡に、一滴の毒を注ぐに忍びない。よしやせつない思をしても、その思を我胸一つに畳んで置こうと決心した。そしてこの決心と同時に、これまで人にたよることしか知らなかつたお玉が、始て独立したような心持になつた。

この時からお玉は自分で自分の言つたり為たりする事を窃に觀察するようになって、末造が来てもこれまでのように蟠まりのない直情で接せず、意識してもてなすようになった。その間別に本心があつて、体を離れて傍へ退いて見ている。そしてその本心は末造をも、末造の自由になつてゐる自分をも嘲笑つてゐる。お玉はそれに始て気が附いた時ぞつとした。しかし時が立つと共に、お玉は慣れて、自分の心はそうなくてはならぬもののように感じて来た。

それからお玉が末造を遇することは愈厚くなつて、お玉の心は愈末造に疎くなった。そして末造に世話になつてゐるのが難有くもなく、自分が末造の為向けてくれる事を恩に

被^きないでも、それを末造に對して氣の毒がるには及ばぬように感ずる。それと同時に又な
 んの躰^{しつけ}をも受けていない芸なしの自分ではあるが、その自分が末造の持物になって果てる
 のは惜しいように思う。とうとう往來を通る學生を見ていて、あの中に若し頼もしい人が
 いて、自分を今の境^{きようがい}界^{がい}から救^{きう}つてくれるようにはなるまいかとまで考えた。そしてそ
 う云う想像に耽^{ふけ}る自分を、忽^{こつぜん}然意識した時、はつと驚いたのである。

この時お玉と顔を識^しり合つたのが岡田であつた。お玉のためには岡田も只窓の外を通る
 學生の一人に過ぎない。しかし際立つて立派な紅顏の美少年でありながら、己^{うぬぼれ}惚^ぼらしい、
 氣障^{きざ}な態度がないのにお玉は氣が附いて、何とはなしに懐かしい人柄だと思ひ初^そめた。そ
 れから毎日窓から外を見ているにも、又あの人を通りはしないかと待つようになった。

まだ名前も知らず、どこに住まつている人か知らぬうちに、度々顔を見合わすので、お
 玉はいつか自然に親しい心持になつた。そしてふと自分の方から笑ひ掛けたが、それは氣
 の弛^{ゆる}んだ、抑制作用の麻痺^{まひ}した刹那の出来事で、おとなしい質^{たち}のお玉にはこちらから恋を
 し掛けようと、はつきり意識して、故意にそんな事をする心はなかつた。

岡田が始て帽子を取つて会釈した時、お玉は胸を躍らせて、自分で自分の顔の赤くなる

のを感じた。女は直覺が鋭い。お玉には岡田の帽子を取ったのが発作的行為で、故意にしないのでないことが明白に知れていた。そこで窓の格子を隔てた覺束おぼつかない不言の交際まじりが爰こゝに新しい [epoque] 《エポック》に入ったのを、この上もなく嬉しく思つて、幾度いくたびも繰り返しては、その時の岡田の様子を想像えがに画えがいて見るのであつた。

妾も檀那の家にいると、世間並の保護もとの下に立っているが、困物には人の知らぬ苦勞がある。お玉の内へも或る日 印絆纏しるしばんてんを裏返して着た三十前後の男が来て、下総しもづさのもので国へ帰るのだが、足を傷めて歩かれぬから、合力ごうりきをしてくれと云つた。十錢銀貨を紙に包んで、梅に持たせて出すと紙を明けて見て、「十錢ですかい」と云つて、にやりと笑つて、「おお方間違だらうから、聞いて見てくんねえ」と云いつつ投げ出した。

梅が真つ赤になつて、それを拾つて這入る跡から、男は無遠慮に上がつて来て、お玉の炭をついでいる箱火鉢の向うに据わつた。なんだか色々な事を云うが、取り留めた話ではない。監獄にいた時どうだとか云うことを幾度いくども云つて、息張いばるかと思えば、泣言を言っている。酒の勻においが胸の悪い程するのである。

お玉はこわくて泣き出したいのを我慢して、その頃通用していた骨牌かるたのような形の青い

五十銭札を二枚、見ている前で出して紙に包んで、黙って男の手に渡した。男は存外造作なく満足して、「半助でも二枚ありやあ結構だ、姉ねえさん、お前さんは分りの好い人だ、きつと出世しますよ」と云つて、覺束ない足を踏み締めて歸つた。

こんな出来事があったので、お玉は心細くてならぬ所から、「隣を買う」と云うことも覚えて、変つた菜でも拵こしらへた時は、一人暮らしでいる右隣の裁縫のお師匠さんの所へ、梅に持たせて遣るようになった。

師匠はお貞ていと云つて、四十を越しているのに、まだどこやら若く見える所のある、色の白い女である。前田家の奥で、三十になるまで勤めて、夫を持ったが間もなく死なれてしまったと云う。詞遣が上品で、お家流の手を好く書く。お玉が手習がしたいと云つた時、手本などを貸してくれた。

或る日の朝お貞が裏口から、前日にお玉の遣つた何やらの札を言いに来た。暫く立話をしているうちに、お貞が「あなた岡田さんがお近づきですね」と云つた。

お玉はまだ岡田と云う名を知らない。それでいて、お師匠さんの云うのはあの学生さんの事だと云うこと、こう聞かれるのは自分に辞儀をした所を見られたのだと云うこと、この場合では厭でも知つた振をしなくてはならぬと云うことなどが、稲妻のように心頭を掠かす

めて過ぎた。そして遲疑した跡をお貞が認め得ぬ程速すみかに、「ええ」と答えた。

「あんなお立派な方でいて、大層品行が好くてお出なさるのですつてね」とお貞が云った。
「あなた好く御存じね」と大胆にお玉が云った。

「上条のお上さんも、大勢学生さん達が下宿していなすつても、あんな方は外にないと云つていますの」こう云つて置いて、お貞は歸つた。

お玉は自分が褒められたような気がした。そして「上条、岡田」と口の内で繰り返した。

拾じゅう漆しち

お玉の所へ末造の来る度数は、時の立つに連れて少くはならないで、却かえつて多くなつた。それはこれまでのように極きまつて晩に来る外に、不規則な時間にちよいちよい来るようになったのである。なぜそうなつたかと云うに、女房のお常がうるさく附まき纏まとつて、どうかしてくれ、どうかしてくれと云うので、ふいと逃げ出して無縁坂へ来るからである。いつも末造がそんな時、どうもすることはない、これまで通りにしていれば好いいのだと云うと、どうにかしなくてはいられぬと云つて、里へ歸られぬ事や、子供の手放されぬ事や、自分

の年を取った事や、つまり生活状態の変更に対するあらゆる障^{しょうがい}碍^{がい}を並べて口説き立てる。それでも末造はどうもすることはない、どうもしなくても好いと繰り返す。そのうちにお常は次第に腹を立てて来て、手が付けられぬようになる。そこで飛び出すことになっている。何事も理窟^{りくつ}っぽく、数学的に物を考える末造が為^ためには、お常の言っている事が不思議でならない。丁度一方が開け放されて、三方が壁で塞^{ふさ}がれている間の^ま、その開け放された戸口を背にして立っていて、どちらへも往^ゆかれぬと云って、悶^{もん}え苦む人を見るような気がする。戸口は開け放されているではないか。なぜ振り返って見ないのだと云うより外に、その人に対して言うべき詞はない。お常の身の上はこれまでより楽にこそなっているが、少しも压制だの窘^{きんぱく}迫^せだの掣^{せいちゆう}肘^{じゆう}だのを受けてはいない。なるほど無縁坂と云うものが新に出来たには相違ない。しかし世間の男のように、自分はその為めに、女房に冷^れ澹^{たん}になったとか、苛酷^{きこく}になったとか云うことはない。寧^{むし}ろこれまでよりは親切に、寛大に取り扱っている。戸口は依然として開け放されているではないかと思ふのである。

無論末造のこう云う考には、身勝手が交っている。なぜと云うに、物質的に女房に為向ける事がこれまでと変らぬにしても、又自分が女房に対する詞や態度が変らぬにしても、お玉と云うものがある今を、いなかた昔と同じように思えと云うのは、無理な要求であ

る。お常がために目の内の刺とげになつてゐるお玉ではないか。それを抜いて安心させて遣らうと云う意志が自分には無いではないか。固もとよりお常は物事に筋道を立てて考えるような女ではないから、そんな事をはつきり意識してはいぬが、末造の謂いう戸口が依然として開け放されてはいない。お常が現在の安心や未来の希望を覗のぞく戸口には、重くろしい、黒い影が落ちてゐるのである。

或る日末造は喧嘩けんかをして、内をひよいと飛び出した。時刻は午前十時過ぎでもあつただろう。直ぐに無縁坂へ往きこうかとも思つたが、生憎女中が小さい子を連れて、七軒町の通にいたので、わざと切きり通とおしの方へ抜けて、どこへ往くと云う気もなしに、天神町から五軒町へと、忙がしそうに歩いて行つた。折々「糞くそ」「畜生」などと云う、いかがわしい単語を口の内でつぶやいてゐるのである。昌平橋に掛かる時、向うから芸者が来た。どこかお玉に似てゐると思つて、傍わきを摩され違ちがうのを好く見れば、顔は雀斑そばかすだらけであつた。矢やつ張はりお玉の方が別品だなど思うと同時に、心に愉快と満足とを覚えて、暫く足を橋の上に駐とめて、芸者の後うしろ影かげを見送つた。多分買物にでも出たのだろう、雀斑芸者は講武所の横町へ姿を隠してしまつた。

その頃まだ珍らしい見物みものになつてゐた眼鏡橋めがねばしの袂たもとを、柳原の方へ向いてぶらぶら歩い

て行く。川岸の柳の下に大きい傘を張って、その下で十二三の娘にかっぽれを踊らせている男がある。その周囲にはいつものように人が集まって見ている。末造がちよいと足を駐めて踊を見ていると、印半纏を着た男が打つ附かりそうにして、避けて行つた。目ざとく振り返つた末造と、その男は目を見合せて直ぐに背中を向けて通り過ぎた。「なんだ、目の見えねえ」とつぶやきながら、末造は袖に入れていた手で懷中を捜した。無論何も取られてはいなかつた。この攫徒は實際目先が見えぬのであつた。なぜと云うに、末造は夫婦喧嘩をした日には、神経が緊張して、不断氣の附かぬ程の事にも氣が附く。鋭敏な感覺が一層鋭敏になつてゐる。攫徒の方ですらうと云う意志が生ずるに先だつて、末造はそれを感じる位である。こんな時には自己を抑制することの出来るのを誇つてゐる末造も、多少その抑制力が弛んでゐる。しかし大抵の人にはそれが分からない。若し非常に感覺の鋭敏な人がいて、細かに末造を観察したら、彼が常より稍能弁になつてゐるのに氣が附くだろう。そして彼の人の世話を焼いたり、人に親切らしい事を言つたりする言語挙動の間に、どこか慌ただしいような、稍不自然な処のあるのを認めるだろう。

もう内を飛び出してから余程時間が立つたように思つて、川岸を跡へ引き返しつつ懷時計を出して見た。まだやつと十一時である。内を出てから三十分も立つてはいぬの

である。

末造は又どこを当ともなしに、淡路町あわじちようから神保町じんぼうちようへ、何か急な用事でもありそうな様子をして歩いて行く。今川小路の少し手前に御茶漬と云う看板を出した家がある頃あった。二十銭ばかりでお膳を据えて、香の物に茶まで出す。末造はこの家を知っているのひるで、午を食ひるべに寄ろうかと思つたが、それにはまだ少し早かつた。そこを通り過ぎると、右へ廻つてまないたほし姐橋の手前の広い町に出る。この町は今のようするがだいに駿河台の下まで広々と附いていたのではない。殆ど袋町ふくろまちのように、今末造の来た方角へ曲がる処で終つて、それから医学生が虫様突起と名づけた狭い横町が、あの山岡鉄舟の字を柱に掘り附けた社やしろうの前を通つていた。これは袋町めいた、姐橋の手前の広い町を盲腸たに譬たとえたものである。

末造は姐橋を渡つた。右側に飼鳥かいとりを売る店があつて、いろいろな鳥の賑にぎやかな囀さえずりが聞える。末造は今でも残つているこの店の前に立ち留まつて、檐のきに高く吊つつてある鸚鵡おうむや秦吉了いんこの籠かご、下に置き並べてある白鳩しらほとや朝鮮鳩の籠などを眺めて、それから奥の方に幾段にも積み置かさねてある小鳥の籠に目を移した。啼なくにも飛び廻るにも、この小さい連中が最も声高こわだかで最も活潑であるが、中にも目立だつて籠の数が多く、賑やかなのは、明るい黄いろな外国種だねのカナリア共であつた。しかし猶なほ好く見ているうちに、沈んだ強い色で小さ

体を彩られている紅雀べにすずめが末造の目を引いた。末造はふいとあれを買って持って往つて、お玉に飼わせて置いたら、さぞふさわしかろうと感じた。そこで余り売りがりもしななさそうな様子をしている爺いさんに値を問うて、一つがいの紅雀を買った。代を払ってしまった時、爺いさんはどうして持つて行くかと問うた。籠に入れて売るのではないかと云えば、そうでないと言ふ。ようよう籠を一つ頼むようにして売って貰って、それに紅雀を入れさせた。幾羽もいる籠へ、萎しなびた手をあらあらしく差し込んで、二羽攫つかみ出して、空籠からかごに移し入れるのである。それで雌雄めあすが分かるかと云えば、しづしづ「へえ」と返事をした。

末造は紅雀の籠を提げて俎橋の方へ引き返した。こん度は歩き方が緩やかになって、折々籠を持ち上げては、中の鳥を覗いて見た。喧嘩をして内を飛び出した気分が、拭い去つたように消えてしまつて、不断この男のどこかに潜んでいる、優しい心が表面に浮び出ている。籠の中の鳥は、籠の揺れるのを怯おそれてか、止まり木をしつかり攫んで、羽をすぼめるようにして、身動きもしない。末造は覗いて見る度に、早く無縁坂の家に持つて往つて、窓の所に弔るして遣りたいと思つた。

今川小路を通る時、末造は茶漬屋に寄つて午ひるしょく食をした。女中の据えた黒塗の膳の向

うに、紅雀の籠を置いて、目に可哀らしい小鳥を見、心に可哀らしいお玉の事を思いつつ、末造は余り御馳走でもない茶漬屋の飯を旨うまそうに食った。

拾捌じゅうはち

末造がお玉に買つて遣つた紅雀は、凶らずもお玉と岡田とが詞ことばを交す媒なかたちとなった。

この話をし掛けたので、僕はある年の氣候の事を思い出した。あの頃は亡くなつた父が秋草きたせんじゆを北千住の家の裏庭に作つていたので、土曜日に上条から父の所へ歸つて見ると、もう二百十日が近いからと云つて、篠竹しのだけを沢山買つて来て、女郎花おみなえしやら藤袴ふじばかまやらに一本一本それを立て副そえて縛つていた。しかし二百十日は無事に過ぎてしまった。それから二百二十日があぶないと云つていたが、それも無事に過ぎた。しかしその頃から毎日毎日のたたずまいが不穩たつみになつて、暴模様あれもようが見える。折々又夏に戻つたかと思うような蒸暑いことがある。巽たつみから吹く風が強くなりそうになつては又歇やむ。父は二百十日が「なしくずし」になつたのだと云つていた。

僕は或る日曜日の夕方に、北千住から上条へ歸つて来た。書生は皆外へ出ていて、下宿

屋はひっそりしていた。自分の部屋へ這入^{はい}つて、暫^{しばら}くぼんやりしていると、今まで誰もいないと思つていた隣の部屋でマツチを磨^する音がする。僕は寂しく思つていた時だから、直ぐに声を掛けた。

「岡田君。いたのか」

「うん」返事だか、なんだか分からぬような声である。僕と岡田とは随分心安くなつて、他人行儀はしなくなつていたが、それにしてもこの時の返事はいつもとは違つていた。

僕は腹の中で思つた。こつちもぼんやりしていたが、岡田も矢^やつ張^{ぱり}ぼんやりしていたようだ。何か考え込んでいたのではあるまいか。こう思うと同時に、岡田がどんな顔をしているか見たいような気がした。そこで重ねて声を掛けて見た。「君、邪魔をしに往つても好^いいかい」

「好いどころじゃない。実はさつき帰つてからぼんやりしていた所へ、君が隣へ帰つて来てがたがた云わせたので、奮つて明りでも付けようと云う氣になつたのだ」こん度は声はつきりしている。

僕は廊下に出て、岡田の部屋の障子を開けた。岡田は丁度鉄門の真向いになつて居る窓を開けて、机に肘^{ひじ}を衝^ついて、暗い外の方を見ている。豎^{たて}に鉄の棒を打ち附けた窓で、その

外には犬走りに植えた側柏ひのきが二三本埃ほこりを浴びて立っているのである。

岡田は僕の方へ振り向いて云った。「きようも又妙にむしむしするじゃないか。僕の所には蚊が二三疋びきいてうるさくてしようがない」

僕は岡田の机の横の方に胡坐あぐらを搔かいた。「そうだねえ。僕の親父は二百十日のなし崩しと称している」

「ふん。二百十日のなし崩しとは面白いねえ。なる程そうかも知れないよ。僕は空が曇ったり晴れたりしているもんだから、出ようかどうしようかと思つて、とうとう午前ひるめしの間中寝転んで、君に借りた金瓶梅きんべいばいを讀んでいたのだ。それから頭がぼうつとして来たので、午飯ひるめしを食つてからぶらぶら出掛けると、妙な事に出逢つてねえ」岡田は僕の顔を見ずに、窓の方へ向いてこう云つた。

「どんな事だい」

「蛇退治を遣つたのだ」岡田は僕の方へ顔を向けた。

「美人をでも助けたのじゃないか」

「いや。助けたのは鳥だがね、美人にも関係しているのだよ」

「それは面白い。話して聞かせ給え」

拾玖 じゅうく

岡田はこんな話をした。

雲が慌ただしく飛んで、物狂おしい風が一吹二吹衝突的に起つて、街の塵を捲き上げては又息む午過ぎに、半日読んだ支那小説に頭を痛めた岡田は、どこへ往くと云う当てもなしに、上条の家を出て、習慣に任せて無縁坂の方へ曲がった。頭はぼんやりしていた。一体支那小説はどれでもそうだが、中にも金瓶梅は平穩な叙事が十枚か二十枚かあると思うと、約束したように怪しからん事が書いてある。

「あんな本を読んだ跡だからねえ、僕はさぞ馬鹿げた顔をして歩いていただろうと思うよ」と、岡田は云った。

暫くして右側が岩崎の屋敷の石垣になつて、道が爪先下りになつた頃、左側に人立ちのしているのに気が附いた。それが丁度いつも自分の殊更に見て通る家の前であつたが、その事だけは岡田が話す時打ち明けずじまつた。集まっているのは女ばかりで、十人ばかりもいただろう。大半は小娘だから、小鳥の囀るように何やら言つて喋いでいる。岡田

は何事も弁えず、又それを知ろうと云う好奇心を起す暇もなく、今まで道の真ん中を歩いていた足を二三歩その方へ向けた。

大勢の女の目が只一つの物に集注しているので、岡田はその視線を辿ってこの騒ぎの元を見附けた。それはその家の格子窓の上に吊るしてある鳥籠である。女共の騒ぐのも無理は無い。岡田もその籠の中の様子を見て驚いた。鳥はばたばた羽ばたきをして、啼きながら狭い籠の中を飛び廻っている。何物が鳥に不安を与えているのかと思つて好く見れば、大きい青大將が首を籠の中に入れていたのである。頭を楔のように細い竹と竹との間に押し込んだものと見えて、籠は一寸見た所では破れてはいない。蛇は自分の体の大きの入口を開けて首を入れたのである。岡田は好く見ようと思つて二三歩進んだ。小娘共の肩を並べている背後に立つようになったのである。小娘共は言い合せたように岡田を救助者として迎える気になつたらしく、道を開いて岡田を前へ出した。岡田はこの時又新しい事実を発見した。それは鳥が一羽ではないと云う事である。羽ばたきをして逃げ廻っている鳥の外に、同じ羽色の鳥が今一羽もう蛇に銜えられている。片方の羽の全部を口に含まれているに過ぎないのに、恐怖のためか死んだようになって、一方の羽をぐたりと垂れて、体が綿のようになっている。

この時家の主人らしい稍年上の女が、慌ただしげに、しかも遠慮らしく岡田に物を言った。蛇をどうかしてくれるわけには行くまいかと云うのである。「お隣へお為事しごとのお稽古けいこに来ていらつしやる皆さんが、すぐに大勢でいらつしやつて下すつたのですが、どうも女の手ではどうする事も出来ませんでございませう」と女は言い足した。小娘の中の一人が、「この方が鳥の騒ぐのを聞いて、障子を開けて見て、蛇を見附けなすつた時、きやつと声を立てなすつたもんですから、わたし共はお為事を置いて、皆出て来ましたが、本当にどうもいたすことが出来ませんの、お師匠さんはお留守ですが、いらつしやつたつてお婆あさんの方かたですから駄目ですわ」と云つた。師匠は日曜日に休まずに一六いちろくに休むので、弟子が集まつていたのである。

この話をする時岡田は、「その主人の女と云うのがなかなか別品なのだよ」と云つた。しかし前から顔を見知つていて、通る度に挨拶をする女だとは云わなかつた。

岡田は返辞をするより先きに、籠の下へ近寄つて蛇の様子を見た。籠は隣の裁縫の師匠の家の方に寄せて、窓に吊るしてあつて、蛇はこの家と隣家との間から、庇ひさしの下をつたつて籠にねらい寄つて首を挿し込んだのである。蛇の体は繩を掛けたように、庇の腕木を横切つていて、尾はまだ隅の柱のさきくさきに隠れている。随分長い蛇である。いずれ草木の茂つ

た加賀屋敷のどこかに住んでいたのがこの頃の気圧の変調を感じてさまよい出て、途中でこの籠の鳥を見附けたものだろう。岡田もどうしようかとちよいと迷った。女達がどうもすることの出来なかつたのは無理も無いのである。

「何か刃物はありませんか」と岡田は云った。主人の女が一人の小娘に、「あの台所にある出刃を持ってお出で」と言い附けた。その娘は女中だったと見えて、稽古に隣へ来ていると云う外の娘達と同じような湯帷子を着た上に紫のメリンスでくけた襷を掛けていた。肴を切る庖刀で蛇を切られては困るとでも思ったか、娘は抗議をするような目附きをして主人の顔を見た。「好いよ、お前の使うのは新らしく買って遣るから」と主人が云った。娘は合点が行つたと見えて、駆けて内へ這入つて出刃庖刀を取つて来た。

岡田は待ち兼ねたようにそれを受け取つて、穿いていた下駄を脱ぎ棄てて、肱掛窓へ片足を掛けた。体操は彼の長技である。左の手はもう庇の腕木を握っている。岡田は庖刀が新しくはあつても余り鋭利でないことを知っていたので、初から一撃に切ろうとはしない。庖刀で蛇の体を腕木に押し附けるようにして、ぐりぐりと刃を二三度前後に動かした。蛇の鱗の切れる時、硝子を砕くような手ごたえがした。この時蛇はもう羽を銜えていた鳥の頭を頬のうちに手繰り込んでいたが、体に重傷を負つて、波の起伏のような運動をしな

がら、獲物を口から吐こうともせず、首を籠から抜こうともしなかった。岡田は手を弛めずに庖刀を五六度も前後に動かしたかと思う時、鋭くもない刃がとうとう蛇を**俎上**の肉の如くに両断した。絶えず体に波を打たせていた蛇の**下半身**が、先**ま**ず**ばたり**と**麦門冬**の植えてある雨垂落の上に落ちた。続いて**上半身**が這つていた窓の鴨居の上をはずれて、首を籠に挿し込んだままぶらりと下がった。鳥を半分銜えてふくらんだ頭が、弓なりに撓められて折れずにいた籠の竹に**つか**えて抜けずにいるので、上半身の重みが籠に加わつて、籠は四十五度位に傾いた。その中では生き残つた一羽の鳥が、不思議に精力を消耗し尽さずに、また羽ばたきをして飛び廻つていたのである。

岡田は腕木に**か**ら**ら**でいた手を放して飛び降りた。女達はこの時まで一同息を屏めて見ていたが、二三人はここまで見て裁縫の師匠の家に這入つた。「あの籠を卸して蛇の首を取らなくては」と云つて、岡田は女主人の顔を見た。しかし蛇の半身がぶらりと下がって、切口から黒ずんだ血がぼたぼた窓板の上に垂れているので、主人も女中も内に這入つて吊るしてある麻糸をはずす勇気がなかった。

その時「籠を卸して上げましょうか」と、とんきような声で云つたものがある。集まっている一同の目はその声の方に向いた。声の主は酒屋の小僧であつた。岡田が蛇退治をし

ている間、寂しい日曜日の午後に無縁坂を通るものはなかったが、この小僧がひとり通り掛つて、括縄くくなわで縛つた徳利と通帳かよいちようとをぶら下げたまま、蛇退治を見物していた。そのうち蛇の下半身が麦門冬の上に落ちたので小僧は徳利も帳面も棄てて置いて、すぐに小石を拾つて蛇の創きず口くちを叩いて、叩く度にまだ死に切らない下半身が波を打つように動くのを眺めていたのである。

「そんなら小僧さん済みませんが」と女主人が頼んだ。小さい女中が格子戸から小僧を連れて内へ這入つた。間もなく窓に現れた小僧は万年青おもとの鉢の置いてある窓板の上に登つて、一しよ懸命背伸びをして籠を吊るしてある麻糸を釘くぎからはずした。そして女中が受け取つてくれぬので、小僧は籠を持ったまま窓板から降りて、戸口に廻つて外へ出た。

小僧は一しよに附いて来た女中に、「籠はわたしが持っているから、あの血を掃除しなぐちや行けませんぜ、畳にも落ちましたからね」と、高慢らしく忠告した。「本当に早く血をふいておしまいよ」と、女主人が云つた。女中は格子戸の中へ引き返した。

岡田は小僧の持つて出た籠をのぞいて見た。一羽の鳥は止まり木に止まって、ぶるぶる顫ふるえている。蛇に銜えられた鳥の体は半分以上口の中に這入っている。蛇は体を截きられつつも、最期の瞬間まで鳥を呑もうとしていたのである。

小僧は岡田の顔を見て、「蛇を取りましようか」と云った。「うん、取るのは好いが、首を籠の真ん中の所まで持ち上げて抜くようにしないと、まだ折れていない竹が折れるよ」と、岡田は笑いながら云った。小僧は旨く首を抜き出して、指^{ゆびさき}尖で鳥の尻を引つ張つて見て、「死んでも放しやあがらない」と云った。

この時まで残っていた裁縫の弟子達は、もう見る物が無いと思つたか、揃^{そろ}つて隣の家の格子戸の内に這入つた。

「さあ僕もそろそろお暇^{いとま}をしましょう」と云つて、岡田があたりを見廻した。

女主人はうつとりと何か物を考えているらしく見えていたが、この詞^{ことば}を聞いて、岡田の方を見た。そして何か言いそうにして躊躇^{ちゆうちよ}して、目を脇へそらした。それと同時に女は岡田の手に少し血の附いているのを見附けた。「あら、あなたお手がよごれていますわ」と云つて、女中を呼んで上り口へ手水盥^{ちやうずだらい}を持って来させた。岡田はこの話をする時女の態度を細かには言わなかつたが、「ほんの少しばかり小指の所に血の附いていたのを、よく女が見附けたと、僕は思つたよ」と云つた。

岡田が手を洗っている最中に、それまで蛇の吭^{のど}から鳥の死骸を引き出そうとしていた小僧が、「やあ大変」と叫んだ。

新しい手拭てぬぐいの畳んだのを持って、岡田の側に立っている女主人が、開けたままにしてある格子戸に片手を掛けて外を覗いて、「小僧さん、何」と云った。

小僧は手をひろげて鳥籠を押さえていながら、「も少しで蛇が首を入れた穴から、生きている分の鳥が逃げる所でした」と云った。

岡田は手を洗ってしまったて、女のわたした手拭でふきつつ、「その手を放さずにいるのだぞ」と小僧に言った。そして何かしつかりした糸のような物があるなら貰いたい、鳥が籠の穴から出ないようにするのだと云った。

女はちよつと考えて、「あの元結もとゆいではいかがでございましょう」と云った。

「結構です」と岡田が云った。

女主人は女中に言い附けて、鏡台の抽斗ひきだしから元結を出して来させた。岡田はそれを受け取って、鳥籠の竹の折れた跡に縦横に結び附けた。

「先ず僕の為事はこの位でおしまいでしようね」と云って、岡田は戸口を出た。

女主人は「どうもまことに」と、さも詞に窮したように云って、跡から附いて出た。

岡田は小僧に声を掛けた。「小僧さん。御苦勞ついでにその蛇を棄ててくれないか」

「ええ。坂下のどぶの深い処へ棄てましょう。どこかに縄は無いかなあ」こう云って小僧

はあたりを見廻した。

「縄はあるから上げますよ。それにちよつと待つていて下さいな」女主人は女中に何か言
い附けている。

その隙ひまに岡田は「さようなら」と云つて、跡を見ずに坂を降りた。

ここまで話してしまつた岡田は僕の顔を見て、「ねえ、君、美人の為めとは云いながら、
僕は随分働いただろう」と云つた。

「うん。女のために蛇を殺すと云うのは、神話めいていて面白いが、どうもその話はそれ
ぎりでは済みそうにないね」僕は正直に心に思う通りを言つた。

「馬鹿を言い給え、未完の物なら、発表しはしないよ」岡田がこう云つたのも、きようしよく
矯飾して言つたわけではなかつたらしい。しかし仮にそれぎりで済む物として、幾らか残惜し
く思う位の事はあつたのだろう。

僕は岡田の話の聞いて、単に神話らしいと云つたが、実は今一つすぐに胸に浮んだ事
あるのを隠していた。それは金瓶梅を読みさして出た岡田が、きんれん
金蓮に逢つたのではない
かと思つたのである。

大学の小使上がりで今金貸しをしている末造の名は、学生中に知らぬものが無い。金を借らぬまでも、名だけは知っている。しかし無縁坂の女が末造の妾だと云うことは、知らぬ人もあつた。岡田はその一人である。僕はその頃まだ女の種性を好くも知らなかつたが、それを裁縫の師匠の隣に囲つて置くのが末造だと云うことだけは知っていた。僕の智識には岡田に比べて一日の長があつた。

式拾

岡田に蛇を殺して貰つた日の事である。お玉はこれまで目で会釈をした事しか無い岡田と親しく話をしたために、自分の心持が、我ながら驚く程急劇に変化して来たのを感じた。女には欲しいとは思いつつも買おうとまでは思わぬ品物がある。そう云う時計だとか指環だとか、硝子窓の裏に飾つてある店を、女はそこを通る度に覗いて行く。わざわざその店の前に往こうとまではしない。何か外の用事でその前を通り過ぎることになると、きつと覗いて見るのである。欲しいと云う望みと、それを買うことは所詮企て及ばぬと云う諦めとが一つになつて、或る痛切で無い、微かな、甘い哀傷的情绪が生じている。女は

それを味うことを楽しみにしている。それとは違って、女が買おうと思う品物はその女に強烈な苦痛を感じさせる。女は落ち着いていられぬ程その品物に悩まされる。縦たとい幾日か待てば容易たやすく手に入ると知つても、それを待つ余裕が無い。女は暑さをも寒さをも夜闇よやみをも雨雪うせつをも厭いとわずに、衝動的に思い立つて、それを買いに往くことがある。万引なんと云うことをする女も、別に変つた木で刻まれたものでは無い。只この欲しい物と買いたい物との境界がぼやけてしまった女たるに過ぎない。岡田はお玉のためには、これまで只欲しい物であつたが、今や忽たちまち變じて買いたい物になつたのである。

お玉は小鳥を助けて貰つたのを縁に、どうかして岡田に近寄りたと思つた。最初に考えたのは、何か品物を梅に持たせて礼に遣らうかと云う事である。さて品物は何にしよるか、藤村の田舎いなかまんじゆう饅頭でも買つて遣らうか。それでは余り智慧ちえが無さ過ぎる。世間並の事、誰たれでもしそうな事になってしまう。そんならと云つて、小切れで肘衝ひじつきでも縫つて上げたら、岡田さんにはおぼこ娘の恋のようで可笑おかしいと思われよう。どうも好い思おも附いつきが無い。さて品物は何か工夫が附いたとして、それをつい梅に持たせて遣つたものだらうか。名刺はこないだ仲町なかつちで拵こしらえさせたのがあるが、それを添えただけでは、物足らない。ちよつと一筆書ひしかくいて遣りたい。さあ困つた。学校は尋常科が済むと下がつてしまつて、

それからは手習をする暇も無かったので、自分には満足な手紙は書けない。無論あの御殿奉公をしたと云うお隣のお師匠さんに頼めばわけは無い。しかしそれは厭だ。手紙には何も人に言われぬような事を書く積りではないが、とにかく岡田さんに手紙を遣ると云うことを、誰にも知らせたくない。まあ、どうしたものだろう。

丁度同じ道を往ったり来たりするように、お玉はこれだけの事を順に考え逆に考え、お化粧や台所の指図に一旦まぎれて忘れては又思い出していた。そのうち末造が来た。お玉は酌をしつつも思い出して、「何をそんなに考え込んでいるのだい」と咎められた。「あら、わたくしなんにも考えてなんぞいしませんわ」と、意味の無い笑顔をして見せて、私ひそかに胸をどき附かせた。しかしこの頃はだいぶ修行が詰つんで来たので、何物かを隠していると云うことを、鋭い末造の目にも、容易に見抜かれるような事は無かった。末造が帰った跡で見た夢に、お玉はどうとう菓子折を買って来て、急いで梅に持たせて出した。その跡で名刺も添えず手紙も附けずに遣ったのに気が附いて、はっと思うと、夢が醒さめた。翌日になった。この日は岡田が散歩に出なかつたか、それともこつちで見はずしたか、お玉は恋しい顔を見ることが出来なかつた。その次の日は岡田が又いつものように窓の外を通った。窓の方をちよいと見て通り過ぎたが、内が暗いのでお玉と顔を見合せることは

出来なかつた。その又次の日は、いつも岡田の通る時刻になると、お玉は草くさぼうき帚ほうきを持ち出して、格別ごみ五味も無い格子戸の内を丁寧ていねいに掃除して、自分の穿はいている雪踏せつたの外、只一足しか出して無い駒下駄こまげだを、右に置いたり、左に置いたりしていた。「あら、わたくしが掃きますわ」と云つて、台所から出た梅を、「好いよ、お前は煮物を見ていておくれ、わたし用が無いからしているのだよ」と云つて追い返した。そこへ丁度岡田が通り掛かつて、帽を脱いで会釈をした。お玉は帚ほうきを持ったまま顔を真つ赤にして棒立ぼうだてに立っていたが、何も言うことが出来ずに、岡田を行き過ぎさせてしまった。お玉は手を焼いた火箸ひばしをほうり出すように帚ほうきを棄すてて、雪踏せつたを脱いで急いで上がった。

お玉は箱火鉢はちの傍そばへすわつて、火をいじりながら思った。まあ、私はなんと云う馬鹿だろう。きょうのような涼しい日には、もう窓を開けて覗のぞいては可笑しいと思つて、余計な掃除の真似まねなんぞをして、切角待きかくまちつていた癖くせに、いざと云う場になると、なんにも言うことが出来なかつた。檀那だんなの前では間の悪いような風はしていても、言おうとさえ思えば、どんな事でも言われぬことは無い。それに岡田さんにはなぜ声が掛けられなかつたのだろう。あんなにお世話になつたのだから、お礼を言うのは当あたりまえ前まえだ。それがきよう言われぬようでは、あの方に物を言う折せは無くなつてしまうかも知れない。梅うめを使つかにして何

か持たせて上げようと思つても、それは出来ず、お目に掛かつて、物を言うことが出来なくては、どうにも為し様がなくなつてしまふ。一体わたしはあの時なせ声が出なかつたのだらう。そう、そう。あの時わたしは慥たしかに物を言おうとした。唯何と云つて好よいか分わからなかつたのだ。「岡田さん」と馴々しく呼び掛けることは出来ない。そんならと云つて、顔を見合せて「もしもし」とも云いにくい。ほんにこう思つて見ると、あの時まごまごしたのも無理はない。こうしてゆつくり考かんえて見てさえ、なんと云つて好よいか分わからないのだもの。いやいや。こんな事を思おもうのは矢やつ張はりわたしが馬鹿なのだ。声なんぞを掛けるには及およばない。すぐに外へ駆け出せば好よかつたのだ。そうしたら岡田さんが足を駐とめたに違ちがいない。足さえ駐めて貰もらえば、「あの、こないだは飛んだ事でお世話様になりました」とでも、なんとでも云うことが出来たのだ。お玉はこんな事を考かんえて火をいじっているうちに、鉄瓶の蓋ふたが跳おとり出したので、湯気を洩もらすように蓋を切つた。

それからお玉は自分で物を言おうか、使を遣つからうかと二様に工夫を凝らしはじめた。そのうち夕方は次第に涼しくなつて、窓の障子は開けていにくい。庭の掃除はこれまで朝一度に極きまつていたのに、こないだの事があつてからは、梅が朝晩に掃除をするので、これも手が出しにくい。お玉は湯に往く時刻を遅くして、途中で岡田に逢おうとしたが、坂

下の湯屋までの道は余り近いので、なかなか逢うことが出来なかった。又使を遣ると云うことも、日数ひかずが立てば立つ程出来にくくなった。

そこでお玉は一時こんな事を思つて、無理に諦めを付けていた。わたしはあれきり岡田さんにお礼を言わないでいる。言わなくては済まぬお礼が言わずにあつて見れば、わたしは岡田さんのしてくれた事を恩に被きている。このわたしが恩に被かていると云うことは岡田さんには分かつている筈である。こうなつていのが、却かえつて下手にお礼をしてしまったより好いいかも知れぬと思つたのである。

しかしお玉はその恩に被かていると云うことを端緒にして、一刻も早く岡田に近づいて見たい。唯その方法手段が得られぬので、日々にちにち人知れず腐心している。

お玉は氣の勝つた女で、末造に囲われることになつてから、短い月日の間に、周囲から陽おとしに貶おとしめられ、陰うらやに羨うらやまれる妾と云うものの苦しさを味つて、そのお蔭かげで一種の世間を馬鹿にしたような氣象を養成してはいるが、根が善人で、まだ人に揉もまれていぬので、下宿屋に住まつてゐる書生の岡田に近づくのをひどくおっくうに思つていたのである。

そのうち秋日和に窓を開けていて、又岡田と会釈を交す日があつても、切角親しく物を

言つて、手拭を手渡ししたのが、少しも接近の階段を形づくらずにしまつて、それ程の事
のあつた後のちが、何事もなかつた前と、なんの異なる所もなくなつていた。お玉はそれをひ
どくじれつたく思つた。

末造が来ていても、箱火鉢の中に置いて、向き合つて話をしてる間に、これが岡田さ
んだつたらと思う。最初はそう思う度に、自分で自分の横着を責めていたが、次第に平氣
で岡田の事ばかり思いつつも、話の調子を合せているようになった。それから末造の自由
になつていて、目を瞑つぶつて岡田の事を思うようになった。折々は夢の中で岡田と一しよに
なる。煩わしい順序も運びもなく一しよになる。そして「ああ、嬉しい」と思うとたんに、
相手が岡田ではなくて末造になつてゐる。はつと驚いて目を醒まして、それから神経が興
奮して寐ねられぬので、じれて泣くこともある。

いつの間にか十一月になつた。小春日和が続いて、窓を開けて置いても目立たぬので、
お玉は又岡田の顔を毎日のように見ることが出来た。これまで薄ら寒い雨の日などが続い
て、二三日も岡田の顔の見られぬことがあると、お玉は塞ふさいでいた。それでも飽くまで素
直たちな性なので、梅に無理を言つて迷惑させるような事はない。ましてや末造に不機嫌な顔
を見せなんぞはしない。唯そんな時は箱火鉢の縁ふちに肘を衝ついて、ぼんやりして黙つてゐる

ので、梅が「どこかお悪いのですか」と云ったことがあるだけである。それが岡田の顔がこの頃続いて見られるので、珍らしく浮き浮きして来て、或る朝いつもよりも気軽に内を出て、池の端の父親の所へ遊びに往った。

お玉は父親を一週間に一度ずつ位はきつと尋ねることにしているが、まだ一度も一時間以上腰を落ち着けていたことは無い。それは父親が許さぬからである。父親は往く度に優しくしてくれる。何か旨い物うまい物でもあると、それを出して茶を飲ませる。しかしそれだけの事をしてしまうと、すぐに帰れと云う。これは老人の気の短い為めばかりでは無い。奉公に出したからには、勝手に自分の所に引き留めて置いては済まぬと思うのである。お玉が二度目か三度目に父親の所に来た時、午前のうちは檀那の見えることは決して無いから、少しはゆつくりしていても好いと云ったことがある。父親は承知しなかった。「なる程これまではお出いでがなかつたかも知れない。それでもいつ何の御用事があつてお出なさるかも知れぬではないか。檀那に申し上げておひまを戴いた日は別だが、お前のように買物に出て寄つて、ゆつくりしてはならない。それではどこをうろついているかと、檀那がお思なされても為方が無い」と云うのであつた。

若し父親が末造の職業を聞いて心持を悪くしはすまいかと、お玉は始終心配して、尋ね

て往く度に様子を見るが、父親は全く知らずにいるらしい。それはその筈である。父親は池の端に越して来てから、暫く立つうちに貸本を読むことを始めて、昼間はいつも眼鏡を掛けて貸本を読んでいる。それも実録物とか講談物とか云う「書き本」に限っている。この頃読んでいるのは三河後風土記である。これはだいたい冊数が多いから、当分この本だけで樂めると云っている。貸本屋が「読み本」を見せて勧めると、それは謙の書いてある本だろうと云つて、手に取つて見ようともしない。夜は目が草臥れると云つて本を読まずに、寄せへ往く。寄せで聞くものなら、本当か謙かなどとは云わずに、落語も聞けば義太夫も聴く。主に講釈ばかり掛かる広小路の席へは、余程氣に入つた人が出なくては往かぬのである。道楽は只それだけで、人と無駄話をするに云うことが無いから、友達も出来ない。そこで末造の身の上などを聞き出す因縁は生じて来ぬのである。

それでも近所には、あの隠居の内へ尋ねて来る好い女はなんだろうと穿鑿して、とうとう高利貸の妾だそうだと突き留めたものもある。若し両隣に口のうるさい人でもいると、爺いさんがどんなに心安立をせず^{こころやすだて}にいても、無理にも厭な噂を聞せられるのだが、為合せな事には一方の隣が博物館の属官で、法帖^{ほうじょう}なんぞをいじつて手習ばかりしている男、一方の隣がもう珍らしいものになつている板木師^{はんぎし}で、篆刻^{てんこく}なんぞには手を出さぬ男

だから、どちらも爺いさんの心の平和を破るような虞おそれはない。まだ並んでいる家の中で、店を開けて商売をしているのは蕎麦屋そばやの蓮玉庵と煎餅屋せんべいやと、その先きのもう広小路の角に近い処の十三屋と云う櫛屋くしやとの外には無かつた時代である。

爺いさんは格子戸を開けて這入はいる人のけはい、軽げな駒下駄の音だけで、まだ優しい声のおとないを聞かぬうちに、もうお玉が来たのだと云うことを知って、読みさしの後風土記を下に置いて待つている。掛けていた目金を脱はずして、可哀い娘の顔を見る日は、爺いさんのためには祭日である。娘が来れば、きつと目金を脱す。目金で見た方が好く見える筈だが、どうしても目金越しでは隔てがあるようで気が済まぬのである。娘に話したい事はいつも溜たまつていて、その一部分を忘れて残したのに、いつも娘の帰つた跡で気が附く。しかし「檀那は御機嫌好くてお出になるかい」と末造の安否を問うことだけは忘れない。お玉はきよう機嫌の好い父親の顔を見て、阿茶あちゃの局つぼねの話を見せて貰い、広小路に出来た大千住おおせんじゆの出店で買ったと云う、一尺四方もある軽焼の馳走になつた。そして父親が「まだ帰らなくても好いかい」と度々聞くのに、「大丈夫よ」と笑いながら云つて、とうとう正午近くまで遊んでいた。そしてこの頃のように末造が不意に来ることのあるのを父親に話したら、あの帰らなくても好いかと云う催促が一層劇はげしくなるだろうと、心の中で思つ

た。自分はいつか横着になつて、末造に留守の間まに来られてはならぬと云うような心遣をせぬようになつていたのである。

にじゆういち
貳拾壹

時候が次第に寒くなつて、お玉の家の流しの前に、下駄で踏むとこ処だけ板が土に填うめてある、その板の上には朝霜が真つ白に置く。深い井戸の長い弔瓶つるべなわ縄が冷たいから、梅に気の毒だと云つて、お玉は手袋を買つて遣やつたが、それを一々嵌はめたり脱いだりして、台所の用が出来るものでは無いと思つた梅は、貰つた手袋を大切にしまつて置いて、矢張やはり素手で水を汲む。洗物をさせるにも、雑巾掛ぞうきんがけをさせるにも、湯を涌わかして使わせるのに、梅の手がそろそろ荒れて来る。お玉はそれを気にして、こんな事を言つた。「なんでも手を濡らした跡をそのままにして置くのが悪いのだよ。水から手を出したら、すぐに好く拭いて乾かしてお置。用が片附いたら、忘れないでシャボンで手を洗うのだよ」こう云つてシャボンまで買つて渡した。それでも梅の手が次第に荒れるのを、お玉は気の毒がつている。そしてあの位の事は自分もしたが、梅のように手の荒れたことは無かつたのにと、不思議

にも思うのである。

朝目を醒まして起きずにはいられなかつたお玉も、この頃は梅が、「けきは流しに氷が張つています、もしお休になつていらつしやいまし」などと云うと、つい布団にくるまつている様になつた。教育家は妄想もうぞうを起させぬために青年に床に入つてから寐附かずにいるな、目が醒めてから起きずにいるなと戒める。少壮な身を暖い衾ふすまうちの裡に置けば、毒草の花を火の中に咲かせたような写象が萌きよすからである。お玉の想像もこんな時には随分放恣うしになつて来ることがある。そう云う時には目に一種の光が生じて、酒に酔つたように瞼まぶたから頬に掛け紅くれなゐみなきが漲るのである。

前ぜん晩ばんに空が晴れ渡つて、星がきらめいて、曉に霜の置いた或る日の事であつた。お玉はだいぶ久しく布団の中で、近頃覚えた不精ぶしやうをしていて、梅が疾とつくに兩戸を繰り開けた表の窓から、朝日のさし入るのを見て、やっと起きた。そして細帯一つでねんねはんてこ半纏はんてんを羽織つて、縁側に出て楊枝やうじを使つていた。すると格子戸をがらりと開ける音がする。「いらつしやいまし」と愛想好く云う梅の音がする。そのまま上がつて来る足音がする。「やあ。寐坊だなあ」こう云つて箱火鉢の前に据わつたのは末造である。「おや。御免なさいましよ。大そうお早いじやございませんか」銜くわえていた楊枝を急いで

出して、唾つばきをバケツの中に吐いてこう云つたお玉の、少しのぼせたような笑顔が、末造の目にはこれまでになく美しく見えた。一体お玉は無縁坂に越して来てから、一日一日と美しくなるばかりである。最初は娘らしい可哀さが氣に入っていたのだが、この頃はそれが一種の人を魅するような態度に変わって来た。末造はこの変化を見て、お玉に情愛が分かつて来たのだ、自分が分からせて遣つたのだと思つて、得意になっている。しかしこれは何事をも鋭く看破する末造の目が、笑止にも愛する女の精神状態あやまを錯り認めているのである。お玉は最初主人大事に奉公をする女であつたのが、急劇な身の上の変化のために、煩悶はんもんして見たり省察せいさつして見たりした挙句、横着と云つても好いいような自覚に到達して、世間の女が多くの人に触れた後に纒わづかに贏かち得る冷静な心と同じような心になった。この心に翻弄ほんろうせられるのを、末造は愉快な刺戟しげきとして感ずるのである。それにお玉は横着になると共に、次第に少しづつじだらくなる。末造はこのじだらくに情慾あおを煽られて、一層お玉に引き付けられるように感ずる。この一切の変化が末造には分からない。魅せられるような感じはそこから生れるのである。

お玉はしやがんで金盃かなだらいを引き寄せながら云つた。「あなた一ちよつと寸あちらへ向いていて下さいましな」

「なぜ」と云いつつ、末造は金天狗きんてんぐに火を附けた。

「だって顔を洗わなくちや」

「好いじゃないか。さつさと洗え」

「だって見ていらつしやつちや、洗えませんわ」

「むずかしいなあ。これで好いか」末造は烟けぶりを吹きつつ縁側に背中を向けた。そして心になんと云うあどけない奴だろうと思つた。

お玉は肌も脱えりがずに、只領えりだけくつろげて、忙がしげに顔を洗う。いつもより余程手を抜いてはいるが、化粧の秘密を藉かりて、庇きずを蔽おおい美よそおを粧よそおうと云う弱点も無いので、別に見られていて困ることは無い。

末造は最初背中を向けていたが、暫くするとお玉の方へ向き直つた。顔を洗う間末造に背中を向けていたお玉はこれを知らずにいたが、洗つてしまつて鏡台を引き寄せると、それに末造の紙巻を銜えた顔がうつつた。

「あら、ひどい方ね」とお玉は云つたが、そのまま髪を撫なで附けている。くつろげた領の下に項うなじから背へ掛けて三角形に見える白い肌、手を高く挙げているので、肘の上二三寸の所まで見えるふつくりした臂ひじが、末造のためにはいつまでも厭あきない見ものである。そこ

で自分が黙って待つていたら、お玉が無理に急ぐかも知れぬと思つて、わざと気楽げにゆつくりした調子で話し出した。

「おい急ぐには及ばないよ。何も用があつてこんなに早く出掛けて来たのではないのだ。実はこないだお前に聞かれて、今晚あたり来るように云つて置いたが、ちよいと千葉へ往かなくてはならない事になったのだ。話が旨く運べば、あすのうちに歸つて来られるのだが、どうかするとあさつてになるかも知れない」

櫛をふいていたお玉は「あら」と云つて振り返つた。顔に不安らしい表情が見えた。

「おとなしくして待つているのだよ」と、笑談じょうだんらしく云つて、末造は巻烟草まきたばこ入をしまつた。そしてついと立つて戸口へ出た。

「まあお茶も上げないうちに」と云いさして、投げけるように櫛を櫛箱に入れたお玉が、見送りたに起つて出た時には、末造はもう格子戸を開けていた。

朝飯の膳を台所から運んで来た梅が、膳を下に置いて、「どうも済みません」と云つて手を衝いた。

箱火鉢の傍に据わつて、火の上に被かぶさつた灰を火箸で掻かき落していたお玉は、「おや、

何をあやまるのだい」と云つて、にっこりした。

「でもついお茶を上げるのが遅くなりまして」

「ああ。その事かい。あれはわたしが御挨拶に云つたのだよ。檀那はなんとも思つてはお出ないでさらないよ」こう云つて、お玉は箸を取つた。

けさ御膳を食べている主人の顔を梅が見ると、めつたに機嫌を悪くせぬ性分ではあるが、特別に嬉しそうに見える。さつき「何をあやまるのだい」と云つて笑つた時から、ほんのりと赤くにお勻つた頬のあたりをまだ微笑の影ほほえみが去らずにいる。なぜだろうかと云う問題が梅の頭にも生ぜずには済まなかつたが、飽くまで単純な梅の頭にはそれが根を卸しもしない。只好い気持が伝染して、自分も好い気持になつただけである。

お玉はじつと梅の顔を見て、機嫌の好い顔を一層機嫌を好くして云つた。「あの、お前お内へい往きたかなくつて」

梅は怪訝かいがの目を睜みつた。まだ明治十何年と云う頃には江戸の町家の習慣律が惰力を持つていたので、市中から市中へ奉公に上がつても、敷入やぶいりの日の外には容易に内へは帰られぬことに極まつていた。

「あの今晚は檀那様がいらつしやらないだろうと思うから、お前内へ往つて泊つて来たけ

りやあ泊つて来てても好いよ」お玉は重ねてこう云つた。

「あの本当でございますの」梅は疑つて問い返したのでは無い。過分の恩恵だと感じて、この詞ことばを発したのである。

「嘘なんぞ言うものかね。わたしはそんな罪な事をして、お前をからかったり何かしやしないわ。御飯の跡は片附けなくつても好いから、すぐに往つても好いよ。そしてきようはゆつくり遊んで、晩には泊つてお出。その代りあしたは早く帰るのだよ」

「はい」と云つてお梅は嬉しさに顔を真つ赤にしている。そして父が車夫をしているので、車の二三台並べてある入口の土間や、箆筒たんすと箱火鉢との間に、やっと座布団が一枚布しかれ様になつていて、そこに為事しごとに出ない間は父親が据わつており、留守には母親の据わつている所や、鬢びんの毛がいつも片頬に垂れ掛かつていて、肩から襷たすきを脱したことのめつたに無い母親の姿などが、非常な速度を以て入り替りつつ、小さい頭の中に影絵のように浮かんで来るのである。

食事が済んだので、お梅は膳を下げた。片附けなくても好いとは云われても、洗う物だけは洗つて置かなくてはと思つて、小桶こおけに湯を取つて茶碗や皿をちやらちやら言わせていると、そこへお玉は紙に包んだ物を持つて出て来た。「あら、矢つ張り片附けているのね。

それならばかりの物を洗うのはわけは無いから、わたしがするよ。お前髪はゆうべ結つたのだからそれで好いわね。早く着物をお着替よ。そしてなんにもお土産が無いから、これを持ってお出」こう云つて紙包をわたした。中には例の骨牌かるたのような恰好をした半円の青い札がはいっていたのである。

梅をせき立てて出して置いて、お玉は甲斐かい甲斐がいしく襷つまを掛つけ袂はしを端折はしつて台所に出た。そしてさも面白い事をするように、梅が洗い掛けて置いた茶碗や皿を洗い始めた。こんな為事は昔取つた杵きね柄つかで、梅なんぞが企て及ばぬ程迅速に、しかも周密に出来る筈のお玉が、きようは子供がおもちやを持つて遊ぶより手ぬるい洗いようをしている。取り上げた皿一枚が五分間も手を離れない。そしてお玉の顔は活気のある淡紅色かがやに赫くわいて、目は空くうを見ている。

そしてその頭の中には、極めて楽観的な写象が往来している。一体女は何事によらず決心するまでには気の毒な程迷つて、とつおいつする癖に、既に決心したとなると、男のようさこに左顧右眄さこしないゆうで、[oe&llie'nes] 《オオイエル》を装われた馬うまのように、向うばかり見て猛進するものである。思慮のある男には疑懼ぎくを懐いだかしむる程の障礙しょうがい物ぶつが前途

に横よこたわつていても、女はそれを屑もののかずともしない。それでどうかすると男の敢あえてせぬ事を敢てして、おもいの外に成功することもある。お玉は岡田に接近しようとするのに、若し第三者がいて観察したら、もどかしさに堪えまいと思われる程、逡しゆんじゆん巡しゆんしていたが、けさ末造が千葉へ立つと云つて暇いとまごい乞こに來てから、追手おいてを帆はらに孕はらませた舟のように、志す岸に向つて走る氣になつた。それで梅をせき立てて、親おやもと許もとに返して遣つたのである。邪魔になる末造は千葉へ往つて泊る。女中の梅も親の家に歸つて泊る。これからあすの朝までは、誰にも掣せいちゆう肘うでせられることの無い身の上だと感ずるのが、お玉のためには先まず愉快でたまらない。そしてこうとんとん拍子に事が運んで行くのが、終局の目的の容易に達せられる前兆でなくてはならぬように思われる。きように限つて岡田さんが内の前をお通なさらぬことは決して無い。往ゆきかえり反へんに二度お通なさる日もあるのだから、どうかして一度逢わねずにしてしまふにしても、二度共見のがすようなことは無い。きようはどんな犠牲を払つても物を言い掛けずには置かない。思い切つて物を言い掛けるからは、あの方の足が留められぬ筈が無い。わたしは卑しい妾おとこに身を墮おとしている。しかも高利貸の妾になつてゐる。だけれど生きむすめ娘むすめでいた時より美しくはなつても、醜みにくくはなつていない。その上どうしたのが男に氣に入ると云うことは、不ふしあわせ為あ合あな目に逢つた物怪ものけさいわいの幸さいに、次第に分かつて來てゐる

のである。して見れば、まさか岡田さんに一も二もなく厭いやな女だと思われることはあるまい。いや。そんな事は確かに無い。若し厭な女だと思ってお出なら、顔を見合せる度に礼をして下さる筈が無い。いつか蛇を殺して下すつたのだから。あれがどの内の出来事でも、きつと手を藉して下すつたのだと云うわけではあるまい。若しわたしの内になかったら、知らぬ顔をして通り過ぎておしまいなすつたかも知れない。それにこつちでこれだけ思っているのだから、皆までとは行かぬにしても、この心が幾らか向うに通とおつていないことはない筈だ。なに。案じるよりは生むが易いかも知れない。こんな事を思い続けているうちに、小桶の湯がすっかり冷えてしまったのを、お玉はつめたいとも思わずにいた。

膳を膳棚にしまつて箱火鉢の所に歸つて据わつたお玉は、なんだか気がそわそわしてじつとしてはいられぬと云う様子をしていた。そしてけさ梅が綺麗きれいに篩ふるつた灰を、火箸で二度掻き廻したかと思うと、つと立つて着物を着換えはじめた。同朋町どうぼうちようの女髪結の所へ行くのである。これは不断来る髪結が人の好い女で、余所行よそゆきの時に結いに往けと云つて、紹介して置いてくれたのに、これまでまだ一度も往かなかつた内なのである。

式拾式
にじゅうに

西洋の子供の読む本に、釘一本と云う話がある。僕は好くは記憶していぬが、なんでも車の輪の釘が一本抜けていたために、それに乗って出た百姓の息子が種々の難儀に出会うと云う筋であった。僕のし掛けたこの話では、青魚の未醬煮が丁度釘一本と同じ効果をなすのである。

僕は下宿屋や学校の寄宿舎の「まかない」に饑を凌いでいるうちに、身の毛の弥立つ程厭な菜が出来た。どんな風通しの好い座敷で、どんな清潔な膳の上に載せて出されようとも、僕の目が一たびその菜を見ると、僕の鼻は名状すべからざる寄宿舎の食堂の臭気を嗅ぐ。煮肴に羊栖菜や相良麩が附けてあると、もうそろそろこの嗅覚の hallucination 《アリユシナシヨン》が起り掛かる。そしてそれが青魚の未醬煮に至って窮極の程度に達する。

然るにその青魚の未醬煮が或日上条の晩飯の膳に上った。いつも膳が出ると直ぐに箸を取る僕が躊躇しているの、女中が僕の顔を見て云った。

「あなた青魚がお嫌」

「さあ青魚は嫌じやない。焼いたのなら随分食うが、未醬煮は閉口だ」

「まあ。お上さんが存じませんもんですから。なんなら玉子でも持ってまいりましょうか」
こう云つて立ちそうにした。

「待て」と僕は云つた。「実はまだ腹も透いていないから、散歩をして来よう。お上さんにはなんとでも云つて置いてくれ。菜が氣に入らなかつたなんて云うなよ。余計な心配をさせなくても好いから」

「それでもなんだかお氣の毒様で」

「馬鹿を言え」

僕が立つて袴はかまを穿はき掛けたので、女中は膳を持って廊下へ出た。僕は隣の部屋へ声を掛けた。

「おい。岡田君いるか」

「いる。何か用かい」岡田ははつきりした声で答えた。

「用ではないがね、散歩に出て、帰りに豊国屋へでも往こうかと思うのだ。一しよに來ないか」

「行こう。丁度君に話したい事もあるのだ」

僕は釘に掛けてあつた帽を取つて被つて、岡田と一しよに上条を出た。午後四時過であつたかと思う。どこへ往こうと云う相談もせずに上条の格子戸を出たのだが、二人は門口から右へ曲つた。

無縁坂を降り掛かる時、僕は「おい、いるぜ」と云つて、肘で岡田を衝いた。

「何が」と口には云つたが、岡田は僕の詞の意味を解していたので、左側の格子戸のある家を見た。

家の前にはお玉が立っていた。お玉は窈窕やうでも美しい女であつた。しかし若い健康な美人の常として、粧つくりばえ映えもした。僕の目には、いつも見た時と、どこがどう變つているか、わからなかつたが、とにかくいつもとまるで違つた美しさであつた。女の顔が照り赫まぶしいているようなので、僕は一種の羞明まぶしさを感じた。

お玉の目はうっとりとしたように、岡田の顔に注がれていた。岡田は慌てたように帽を取つて礼をして、無意識に足の運はこびを早めた。

僕は第三者に有ありがち勝あな無遠慮を以て、度々背後うしろを振り向いて見たが、お玉の注視すこぶは頗すこぶる長く継続せられていた。

岡田は俯向き加減うつむになつて、早めた足の運はこびを緩めずに坂を降りる。僕も黙つて附いて降

りる。僕の胸うちの中では種々の感情が戦っていた。この感情には自分を岡田の地位に置きたいと云うことが根調をなしている。しかし僕の意識はそれを認識することを嫌っている。

僕は心の内で、「なに、己おれがそんな卑劣な男なものか」と叫んで、それを打ち消そうとしている。そしてこの抑制が功を奏せぬのを、僕は憤っている。自分を岡田の地位に置きたいと云うのは、彼かの女おんなの誘惑に身を任せたいと思うのではない。只岡田のように、あんな美しい女に慕われたら、さぞ愉快だろうと思うに過ぎない。そんなら慕われてどうするか、僕はそこに意志の自由を保留して置きたい。僕は岡田のように逃げはしない。僕は逢って話をする。自分の清潔な身は汚さぬが、逢って話だけはする。そして彼女を妹の如くに愛する。彼女の力になつて遣る。彼女を淤泥おどいの中うちから救抜する。僕の想像はこんな取留のない処に帰着してしまった。

坂下の四よつし辻つじまで岡田と僕とは黙つて歩いた。真つ直に巡查派出所の前を通り過ぎる時、僕はようよう物を言うことが出来た。「おい。凄すこい状況になつているじゃないか」

「ええ。何が」

「何がも何も無いじゃないか。君だつてさつきからあの女の事を思つて歩いていたに違ない。僕は度々振り返つて見たが、あの女はいつまでも君の後影を見ていた。おおかたまだ

こつちの方角を見て立っているだろう。あの左伝の、目迎えて而してしこうこれを送ると云う文句だねえ。あれをあべこべに女の方で遣っているのだ」

「その話はもうよしてくれ給え。君にだけは顛末てんまつを打ち明けて話してあるのだから、この上僕をいじめなくても好いじゃないか」

こう云っているうちに、池の縁ふちに出たので、二人共ちよいと足を停めた。

「あつちを廻ろうか」と、岡田が池の北の方を指ざした。

「うん」と云つて、僕は左へ池に沿うて曲つた。そして十歩ばかりも歩いた時、僕は左手に並んでいる二階造の家を見て、「ここが桜痴先生おうちと末造君との第宅ていたくだ」と独語ひとりごとのように云つた。

「妙な対照のようだが、桜痴居士も余り廉潔じやないと云うじやないか」と、岡田が云つた。

僕は別に思慮もなく、弁駁べんぱくらしい事を言つた。「そりやあ政治家になると、どんなにしていたつて、難癖なんへきを付けられるさ」恐らくは福地さんと末造との距離を、なるだけ大きく考えたかったのであろう。

福地の邸やしきの板塀いたべいのはずれから、北へ二三軒目の小家こいえに、ついこの頃「川魚」と云う看板

を掛けたのがある。僕はそれを見て云った。「この看板を見ると、なんだか不忍の池の肴を食わせそうに見えるなあ」

「僕もそう思った。しかしまさか梁山泊の豪傑が店を出したと云うわけでもあるまい」
 こんな話をして、池の北の方へ往く小橋を渡った。すると、岸の上に立って何か見ている学生らしい青年がいた。それが二人の近づくのを見て、「やあ」と声を掛けた。柔術に凝っていて、学科の外の本は一切読まぬと云う性だから、岡田も僕も親しくはせぬが、そうかと云って嫌つてもいぬ石原と云う男である。

「こんな所に立って何を見ていたのだ」と、僕が問うた。

石原は黙つて池の方を指ざした。岡田も僕も、灰色に濁つた夕の空気を透かして、指さす方角を見た。その頃は根津に通ずる小溝から、今三人の立っている汀まで、一面に葦が茂つていた。その葦の枯葉が池の中心に向つて次第に疎になつて、只枯蓮の檻樓のような葉、海綿のような房が碁布せられ、葉や房の茎は、種々の高さに折れて、それが鋭角に聳えて、景物に荒涼な趣を添えている。この *dimme* 《ピチュウム》色の茎の間を縫つて、黒ずんだ上に鈍い反射を見せている水の面を、十羽ばかりの雁が緩やかに往来している。中には停止して動かぬのもある。

「あれまで石が届くか」と、石原が岡田の顔を見て云った。

「届くことは届くが、中るか中らぬかが疑問だ」と、岡田は答えた。

「遣つて見給え」

岡田は躊躇した。「あれはもう寐るのだろう。石を投げ附けるのは可哀そうだ」

石原は笑った。「そう物の哀を知り過ぎては困るなあ。君が投げんと云うなら、僕が投げ」

岡田は不精らしく石を拾った。「そんなら僕が逃がして遣る」つづてはひゅうと云う微かな響をさせて飛んだ。僕がその行方をじつと見ていると、一羽の雁が擡げている頸をぐたりと垂れた。それと同時に二三羽の雁が鳴きつつ羽たたきをして、水面を滑って散った。しかし飛び起ちはしなかった。頸を垂れた雁は動かさず故の所にいる。

「中つた」と、石原が云った。そして暫く池の面を見ていて、詞を継いだ。「あの雁は僕が取つて来るから、その時は君達も少し手伝つてくれ給え」

「どうして取る」と、岡田が問うた。僕も覚えず耳を敬てた。

「先ず今は時が悪い。もう三十分立つと暗くなる。暗くさえなれば、僕がわけなく取つて見せる。君達は手を出してくれなくても好いが、その時居合せて、僕の頼むことを聴いて

くれ給え。雁は御馳走するから」と、石原は云った。

「面白いな」と、岡田が云った。「しかし三十分立つまでどうしているのかい」

「僕はこの辺へんをぶらついている。君達はどこへでも往つて来給え。三人ここにいると目立つから」

僕は岡田に言った。「そんなら二人で池を一周して来ようか」

「好かろう」と云つて岡田はすぐに歩き出した。

にじゅうさん
貳拾参

僕は岡田と一しよに花園町の端はなを横切つて、東照宮の石段の方へ往つた。二人の間には暫く詞が絶えている。「不しあわせな雁もあるものだ」と、岡田が独言の様に云う。僕の写象には、何の論理的連れんけい繋もなく、無縁坂の女が浮ぶ。「僕は只雁のいる所を狙つて投げたのだがなあ」と、今度は僕に対して岡田が云う。「うん」と云いつつも、僕は矢張やはり女の事を思っている。「でも石原のあれを取りに往くのが見たいよ」と、僕が暫く立つてから云う。こん度は岡田が「うん」と云つて、何やら考えつつ歩いている。多分雁が気にな

っているであろう。

石段の下を南へ、弁天の方へ向いて歩く二人の心には、とにかく雁の死が暗い影を印して、話がきれぎれになり勝であった。弁天の鳥居の前を通る時、岡田は強いて思想を他の方角に転ぜようとするらしく、「僕は君に話す事があるのだった」と言い出した。そして僕は全く思いも掛けぬ事を聞せられた。

その話はこうである。岡田は今夜己の部屋へ来て話そうと思っていたが、丁度己にさわられたので、一しよに外へ出た。出てからは、食事をする時話そうと思っていたが、それもどうやら駄目になりそうである。そこで歩きながら掻い撮まんで話すことにする。岡田は卒業の期を待たずに洋行することに極ま^きつて、もう外務省から旅行券を受け取り、大学へ退学届を出してしまった。それは東洋の風土病を研究しに来たドイツの Professor 《プロフェツソル》 《ウエエ》 が、往復旅費四千マルクと、月給二百マルクを給して岡田を傭^{やと}つたからである。ドイツ語を話す学生の中で、漢文を楽に読むものと云う注文を受けて、 Baetz 《ベルツ》 教授が岡田を紹介した。岡田は築地^{ウエエ}に W さんを尋ねて、試験を受けた。素問^{そもん}と難^{なん}経^{きやう}とを二三行ずつ、傷寒論と病源候論とを五六行ずつ訳させられたのである。難^{なん}経^{きやう}は生憎^{あいにく} 「三焦」の一節が出て、何と訳して好いかとまごついたが、これは

hiao 《チャオ》と音訳して済ませた。とにかく試験に合格して、即座に契約が出来た。Wさんは Baetz さんの現に籍を置いているライプチヒ大学の教授だから、岡田をライプチヒへ連れて往つて、ドクトルの試験はWさんの手で引き受けてさせる。卒業論文にはWさんのために訳した東洋の文献を使用しても好いと云うことである。岡田はあす上条を出て、築地のWさんの所へ越して往つて、Wさんが支那と日本とで買い集めた書物の荷造をする。それからWさんに附いて九州を視察して、九州からすぐに *Messagerie* 《メツサジュリイ》 *Maritime* 《マリタイム》 会社の舟に乗るのである。

僕は折々立ち留まつて、「驚いたね」とか、「君は果断だよ」とか云つて、随分ゆるゆる歩きつつこの話を聞いた積であった。しかし聞いてしまつて時計を見れば、石原に分れてからまだ十分しか立たない。それにもう池の周囲の殆ど三分の二を通り過ぎて、仲町裏の池の端をはずれ掛かっている。

「このまま往つては早過ぎるね」と、僕は云つた。

「蓮玉へ寄つて蕎麦そばを一杯食つて行こうか」と、岡田が提議した。

僕はすぐに同意して、一しよに蓮玉庵へ引き返した。その頃下谷から本郷へ掛けて一番名高かつた蕎麦屋である。

蕎麦を食いつつ岡田は云つた。「切角今まで遣つて来て、卒業しないのは残念だが、所詮^{よせん}官費留学生になれない僕がこの機会を失すると、ヨオロツパが見られないからね」

「そうだと。機逸すべからずだ。卒業がなんだ。向うでドクトルになれば同じ事だし、又そのドクトルをしなくたって、それも憂うるに足りないじゃないか」

「僕もそう思う。只資格を拵^{こしら}えると云うだけだ。俗に随^{したが}つて聊復爾^{いさまたしか}りだ」

「支度はどうだい。随分慌ただしい旅立になりそうだが」

「なに。僕はこのままで往く。Wさんの云うには、日本で洋服を拵えて行つたつて、向うでは着られないそうだ」

「そうかなあ。いつか花月新誌で読んだが、成島柳北も横浜でふいと思ひ立つて、即坐に決心して舟に乗つたと云うことだった」

「うん。僕も読んだ。柳北は内へ手紙も出さずに立つたそうだが、僕は内の方へは精^くしく言つて遣つた」

「そうか。羨^{うらや}ましいいな。Wさんに附いて行くのだから、途中でまごつくことはあるまいが、旅行はどんな塩^{あんばい}梅^{うめ}だろう。僕には想像も出来ない」

「僕もどんな物だか分からないが、きのう柴田承^{しょうけい}桂^{けい}さんに逢つて、これまで世話にな

つた人だから、今度の一件を話したら、先生の書いた洋行案内をくれたよ」

「はあ。そんな本があるかねえ」

「うん。非売品だ。椋鳥連中に配るのだそうだ」

こんな話をしているうちに、時計を見れば、もう三十分までに五分しかなかった。僕は岡田と急いで蓮玉庵を出て、石原の待つている所へ往った。もう池は闇に鎖されて、弁天の朱塗の祠が模糊として霽の中に見える頃であった。

待ち受けていた石原は、岡田と僕とを引つ張つて、池の縁に出て云った。「時刻は丁度好い。達者な雁は皆疇を変えてしまった。僕はすぐに為事に掛かる。それには君達がいい。見て、号令を掛けてくれなくてはならないのだ。見給え。その三間ばかり前の所に蓮の茎の右へ折れたのがある。その延線に少し低い茎の左へ折れたのがある。僕はあの延線を前へ前へと行かなくてはならないのだ。そこで僕がそれはずれそうになったら、君達がここから右とか左とか云つて修正してくれるのだ」

「なる程。Parallaxe 《パララックセ》のような理窟だな。しかし深くはないだろうか」と岡田が云った。

「なに。背の立たない気遣は無い」こう云つて、石原は素早く裸になった。

石原の踏み込んだ処を見ると、泥は膝の上までしか無い。鷺のように足を上げては踏み込んで、ごぼりごぼりと遣つて行く。少し深くなるかと思うと、又浅くなる。見る見る二本の蓮の茎より前に出た。暫くすると、岡田が「右」と云つた。石原は右へ寄つて歩く。岡田が又「左」と云つた。石原が余り右へ寄り過ぎたのである。忽ち石原は足を停めて身を屈めた。そしてすぐに跡へ引き返して来た。遠い方の蓮の茎の辺を過ぎた頃には、もう右の手に提げている獲ものが見えた。

石原は太股を半分泥に汚しただけで、岸に着いた。獲ものは思い掛けぬ大きな雁であった。石原はぎつと足を洗つて、着物を着た。この辺はその頃まだ人の往来が少なくて、石原が池に這入つてから又上がつて来るまで、一人も通り掛かったものが無かつた。

「どうして持つて行こう」と僕が云うと、石原が袴を穿きつつ云つた。

「岡田君の外套が一番大きいから、あの下に入れて持つて貰うのだ。料理は僕の所でさせる」

石原は素人家の間を借りていた。主人の婆あさんは、余り人の好くないのが取柄で、獲ものを分けて遣れば、口を噤ませることも出来そうである。その家は湯島切通しから、岩崎邸の裏手へ出る横町で、曲りくねつた奥にある。石原はそこへ雁を持ち込む道筋を手

短に説明した。先ずここから石原の所へ往くには、由るべき道が二条ある。即ち南から切通しを經る道と、北から無縁坂を經る道とで、この二条は岩崎邸の内に中心を有した圈えがを画えがいている。遠近の差は少い。又この場合に問う所でも無い。障礙物しょうがいぶつは巡査派出所だが、これはどちらにも一箇所いちこずつある。そこで利害を比較すれば、只振にぎやかな切通しを避けて、寂しい無縁坂を取ると云うことに帰着する。雁は岡田に、外套の下に入れて持たせ、跡の二人が左右に並んで、岡田の体を隠蔽いんぺいして行くが最良の策だと云うのである。

岡田は苦笑しつつも雁を持った。どんなにして持つて見ても、外套の裾すそから下へ、羽が二三寸出る。その上外套の裾が不恰好に拡がって、岡田の姿は円錐形えんすいけいに見える。石原と僕とは、それを目立たせぬようにしなくてはならぬのである。

式拾肆にじゅうし

「さあ、こう云う風にして歩くのだ」と云つて、石原と僕と二人で、岡田を中に挟んで歩き出した。三人で初から氣に掛けてゐるのは、無縁坂下の四辻にある交番である。そこを通り抜ける時の心得だと云つて、石原が盛んな講釈をし出した。なんでも、僕の聴き取つ

た所では、心が動いてはならぬ、動けば隙を生ずる、隙を生ずれば乗せられると云うような事であった。石原は虎が酔人を噉くわぬと云う譬たとえを引いた。多分この講釈は柔術の先生に聞いた事をそのまま繰り返したものかと思われた。

「して見ると、巡査が虎で、我々三人が酔人だね」と、岡田が冷かした。

「Silentium 《シレンチウム》」と石原が叫んだ。もう無縁坂の方角へ曲る角に近くなつたからである。

角を曲れば、茅かやちよう町の町家まちやと池に沿うた屋敷とが背中合せになつた横町で、その頃は両側に荷車や何かが置いてあつた。四辻に立っている巡査の姿は、もう角から見えていた。

突然岡田の左に引き添つて歩いていた石原が、岡田に言った。「君円錐の立方積を出す公式を知っているか。なに。知らない。あれは造做ぞうさはないさ。基底面に高さを乗じたものの三分の一だから、若し基底面が圏になつていれば、 $\frac{1}{3}\pi r^2 h$ が立方積だ。 $\pi \approx 3.1416$ だと云うことを記憶していれば、わけなく出来るのだ。僕は π を小数点下八位まで記憶してゐる。 $\pi = 3.141592653589793238462643383279502884197169399375105820974944592307816406286209$ なのだ。実際それ以上の数は不必要だよ」

こう云っているうちに、三人は四辻を通り過ぎた。巡査は我々の通る横町の左側、交番の前に立って、茅町を根津の方へ走る人力車を見ていたが、我々には只無意味な一瞥いちべつを

投じたに過ぎなかった。

「なんだって円錐の立方積なんぞを計算し出したのだ」と、僕は石原に言ったが、それと同時に僕の目は坂の中程に立つて、こつちを見ている女の姿を認めて、僕の心は一種異様な激動を感じた。僕は池の北の端から引き返す途すがら、交番の巡査の事を思うよりは、この女の事を思っていた。なぜだか知らぬが、僕にはこの女が岡田を待ち受けていそうに思われたのである。果して僕の想像は僕を欺かなかつた。女は自分の家よりは二三軒先へ出迎えていた。

僕は石原の目を掠めるように、女の顔と岡田の顔とを見較べた。いつも薄紅に勻つている岡田の顔は、確に一入赤く染まつた。そして彼は偶然帽を動かすらしく粧つて、帽の底に手を掛けた。女の顔は石のように凝っていた。そして美しく睜つた目の底には、無限の残惜しさが含まれているようであつた。

この時石原の僕に答えた詞は、その響が耳に入っただけで、その意は心に通ぜなかつた。多分岡田の外套が下ぶくれになつていて、円錐形に見える処から思い附いて、円錐の立方積と云うことを言い出したのだと、弁明したのであろう。

石原も女を見ることは見たが、只美しい女だと思つただけで意に介せずじまつたらし

かった。石原はまだ饒舌しやべり続けている。「僕は君達に不動の秘訣ひけつを説いて聞かせたが、君達は修養が無いから、急場に臨んでそれを実行することが出来そうでなかった。そこで僕は君達の心を外へ転ぜさせる工夫をしたのだ。問題は何を出しても好かったのだが、今云ったようなわけで円錐の公式が出たのさ。とにかく僕の工夫は好かったね。君達は円錐の公式のお蔭で、umbefangen 《ウンベファンゲン》な態度を保つて巡査の前を通過することが出来たのだ」

三人は岩崎邸に附いて東へ曲る処に来た。一人乗いちにんのりの人力車が行き違うことの出来ぬ横町に這入るのだから、危険はもう全く無いと云つても好い。石原は岡田の側そばを離れて、案内者のように前に立った。僕は今一度振り返つて見たが、もう女の姿は見えなかった。

僕と岡田とは、その晩石原の所に夜の更ふけるまでいた。雁かりを着さかに酒を飲む石原の相伴をしたと云つても好い。岡田が洋行の事を臆おそびにも出さぬので、僕は色々話したい事のあるのをこらえて、石原と岡田との間に交換せられる競きやう漕そうの経歴談などに耳を傾けていた。上条へ帰つた時は、僕は草臥くたびれ酒の酔えいのために、岡田と話すことも出来ずに、別れて寝た。翌日大学から帰つて見ればもう岡田はいなかった。

一本の釘くぎから大事件が生ずるように、青魚さばの煮肴せんが上条の夕食の饌のぼに上ったために、岡田とお玉とは永遠に相見ることを得ずにしまった。そればかりでは無い。しかしそれより以上の事は雁と云う物語の範囲外にある。

僕は今この物語を書いてしまつて、指を折つて数えて見ると、もうその時から三十五年を経過のちしている。物語の一半は、親しく岡田まじわに交つて見て見たのだが、他の一半は岡田が去つた後に、のち 図らずもお玉と相識になつて聞いたのである。譬たとえば実体鏡の下にある左右二枚の図を、一いつの影像として視みるように、前に見た事と後に聞いた事とを、照らし合せて作つたのがこの物語である。読者は僕に問うかも知れない。「お玉とはどうして相識になつて、どんな場合にそれを聞いたか」と問うかも知れない。しかしこれに対する答も、前に云つた通り、物語の範囲外にある。只僕にお玉の情人になる要約の備わつていぬことは論まを須またぬから、読者は無用の臆測をせぬよが好い。

青空文庫情報

底本：「雁」新潮文庫、新潮社

1948（昭和23）年12月5日発行

1985（昭和60）年11月15日第76刷改版

1988（昭和63）年8月15日82刷

初出：壺、貳、参「スバル 第三年九号」

1911（明治44）年9月

肆、伍「スバル 第三年十号」

1911（明治44）年10月

陸、漆「スバル 第三年十一号」

1911（明治44）年11月

捌、玖「スバル 第三年十二号」

1911（明治44）年12月

拾、拾壺「スバル 第四年二号」

- 1912 (明治45) 年2月
拾貳「スバル 第四年三号」
- 1912 (明治45) 年3月
拾参、拾肆「スバル 第四年四号」
- 1912 (明治45) 年4月
拾伍、拾陸「スバル 第四年六号」
- 1912 (明治45) 年6月
拾漆、拾捌「スバル 第四年七号」
- 1912 (明治45) 年7月
拾玖「スバル 第四年九号」
- 1912 (大正1) 年9月
貳拾「スバル 第五年三号」
- 1913 (大正2) 年3月
貳拾壹「スバル 第五年五号」
- 1913 (大正2) 年5月

式拾貳、式拾參、式拾肆「雁」 靱山書店

1915（大正4）年5月

入力：kompass

校正：浅原庸子

2005年10月17日作成

2014年7月28日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

雁

森鷗外

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>